
営業マンの異世界王様日記

燃やせるゴミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

営業マンの異世界王様日記

【Nコード】

N4171F

【作者名】

燃やせるゴミ

【あらすじ】

年齢は31歳だったはず。自分は日本に居たはず。営業の仕事の途中だったはず。モテないながらも彼女も出来て、幸せな生活を送っていた平凡な男は、ある日突然に日常から投げ出された。

第1話：目覚めたら王城

目を覚ますと見知らぬ石壁が目飛び込んできた。

寝ぼけた頭に疑問符を浮かべながら辺りを観察すると、紋章が描かれたタペストリーや中途半端な畳りガラス、高級そうな家具と赤い絨毯、今身を横たえているベットも、かなりの大きさである事が見て取れた。

首を動かし天井を観察しようとしたが、目に映るのはベットの天幕だった。

「お気づきになりましたか？」

「え？ あ、ああ……はい」

唐突に背後から声を掛けられ慌てたが、声の主が女の子だった為に呆けた声を上げるに留まった。

「ただいまマグダレーナ様をお呼びして参りますので、少々お待ちください」

「……はあ」

そう言い残してパタパタと退室して行っただが、生憎とマグダレーナなる人物を私は知らない。

現在の状況がさっぱり掴めず、記憶の混濁を起しているのかと考えて声に出しての意識確認を行なった。

「田中圭介、新潟県在住の31歳独身。工業用ケミカル用品の卸売り販売の営業マンで、営業所主任。23歳の頃にアパートに移り住み、以降一人暮らし、26歳の頃に佐々木優子と知り合い交際は5年目、そろそろ結婚を考えている」

記憶の最後を辿れば、夕方はその日最後の訪問先だった得意先に向かったが、先方の社長より『遅れる』との連絡があり、時間つぶしの為に、近場の車中でうたた寝をしたところ迄は覚えていた。記憶の混濁は無かったが、現在の状況とまったく繋がらない。

上体を起し部屋の中を見渡せば、欧州辺りの趣向を凝らした高級ホテルの寝室、といった趣だった。

もともと、そんな所に宿泊した経験などあるわけがない、写真やテレビ等の知識との比較だ。

服はいつの間にか着替えさせられており、青のガウンを着用していた。

誘拐かと思ったが、女性や子供や資産家ならともかく、営業マンを誘拐するメリットが無い為可能性は低いと考えた。じゃあ夢かとも思ったが、夢の中で夢か現実かを疑うような経験もなかったし、意識もハッキリしているのでそれも却下した。

「……連絡どうしよう……」

色々悩んだ後に、諦めたように漏れた言葉は仕事の事だった。

起き掛けに声を掛けてきた女の子に害意が無く、とても優しいが、騒ぎ立てる事も無く冷静になれたのは僥倖だった。

いよいよ手詰まりになった頃、部屋のドアがノックされ一人の女性が入室してきた。

エメラルドグリーンのドレスに身を包んだその女性は、スレンダーながらも均整の取れたプロポーションで、サファイヤのような青い瞳が印象的だった。

目鼻立ちの整った美人だが、それでもその表情には温和な部分が見て取れ、所謂癒し系という印象を与えていた。

ブロンドの髪はアップに纏め、髪に宝石をあしらった上品な髪飾りを施し、美を体現したような白人女性だった。

「お加減は如何ですか？」

「んあ？ ……あ、ああ、問題ないです」

見惚れていた為に呆けた返答を返してしまったが、にこやかに微笑み返されたので少し照れた。

「申し遅れました、わたくしはマグダレーナ・フォン・ハルトヴィック王妃です。マレーナとお呼び下さい」

「王妃！？」

なぜ王妃が、と混乱に拍車がかかり目を白黒させてしまった。

「は、はい、こちらこそ田中圭介です。圭介と呼んでください、マレーナ王妃……それで、不躰で申し訳ないのですが……ここが何処なのかとか、現在の状況がさっぱり掴めません。宜しければその辺りの事をお聴きしたいのですが……」

驚きはしたが、ある程度落ち着いて質問出来たのは、王妃と名乗られた事で話半分として聞いていたからだと思う。

「そうですか……では御説明いたしますわ。ここはハルトヴィック王国の王都ハルトヴィック、その王都にある王城ですわ」

しょっぱなから聞いた事も無い固有名詞が飛び出した。その事を確認したかったが、会話を好意的に発展させるのも円滑にするにも、相手の話を遮ってはならない、という営業での経験もあり、とりあえずは全ての話を聞いてからと考えたが、どうやら説明は終了らしい。

「えーっと、申し訳ありません……ハルトヴィック王国という王国を聞いた事が無いのですが、宜しければ周辺の地理も教えて頂けないでしょうか」

「え？ ええ……分かりましたわ」

重ねての質問で、周辺地理の説明が始まった。

ハルトヴィック王国があるローランド大陸には、自国も含め全部で5つの国があり、ハルトヴィック王国は大陸の北西に位置していた。ハルトヴィックに隣接するのは2ヶ国で、南側はモルダウ国、東側はローゼンバーク皇国、ローゼンバーク皇国の南にはドロイゼン国があり、大陸の東端にはベルガー公国が存在する。

周辺国家の名前が出てきたが意味が無かった。

地名は分からないが地理は理解したので、肝心な事を質問した。

「それで……何故私はここで寝ていたのでしょうか？ さっぱり記憶に無いのですが……」

「そうでしたわね、それもご説明いたします」

そう言って聞かされた内容は神話を思わせるものだった。

南に隣接しているモルダウ国とは不可侵協定を結んでおり、友好的な関係を保っている。

東側で隣接するローゼンバーク皇国とは長年戦争を繰り返し、つい先日でも国境にて大規模な戦闘が行なわれていたらしい。

双方共に大量の死傷者を出していたが、突如上空から光の玉が降りてきた。

外縁部にいた両陣営の兵士達が呆けて見上げ、徐々に戦場全域の兵士達はその光の玉に注目しだした為、戦闘は中断された。

光の玉が徐々に降下してきて、凡そ地上10m程度の位置で停止すると、国境を中心に入り乱れて立ち尽くしていた両陣営の兵士達が、突如国境を境に自国側にはじき飛ばされた。

何事かと警戒態勢を取るも、それ以降光の玉に変化は無かった。

我に返った兵士達が再び戦闘を再開させようと動き出したが、いつの間にか国境に発生していた見えない壁によって、人の越境も敵国に向けた攻撃も遮断され、戦場にいた全兵士達に『矛を収めよ』という声が響いたらしい。

夜になっても光の玉は太陽の如く辺りを明るく照らした。

暫く試行錯誤を繰り返したが攻撃は不可能と判断され、両陣営とも戦意が削がれ戦争は終了した。

謎の壁の調査部隊という事で、軍の中で現地に駐留する部隊が選別され始めたが、謎の壁に興味を示した一人の兵士が、何の苦も無く国境を越えた事で事態は更に混迷を極めた。

何度か試すうちに、害意を遮断するという事が判明し、早馬で伝令を出し2日後には伝令が王都に届いた。

取り急ぎ現場に急行するべしとの厳命が出され、マレーナ王妃と近衛騎士団が現場に到着したのが、光の玉出現から15日後の事だった。

マレーナ王妃が馬車から降車し姿を見せると、今まで動きの無かった光の玉がマレーナ王妃に接近し、護衛の騎士が警戒する中マレーナ王妃の目の前で光が収束し、中から意識の無い私が出現したらしい。

「マグダレーナ様、そろそろお時間で御座います」

「ええ、分かったわ。……申し訳ありません圭介様、わたくしは政務をこなさねばなりませんので、しばし席をはずさせて頂きます。なにかありましたら、メイドの者にお申し付け下さい」

顔を合わせた時間は5分少々、話は妄想じみていたし情報も足りなかったが、何より整理する時間が欲しかったので、これ幸いと快諾した。

「……はい、分かりました。お忙しい中恐れ入ります」

「いえ、また夜にお伺い致したく思います。それでは失礼します」

そう言い残しマレーナが退室すると、入れ替わりに朝に見かけたメイドの女の子が姿を現した。

「改めて宜しく願います。顕現者様のお世話を努めさせていただく、メイドのカティ・ブラントと申します。カティと呼び下さい」

緊張で表情も身体も固くしながら挨拶した女の子はカティと名乗った。

少し赤みがかった茶髪を肩位まで伸ばし、幾分茶色の割合が多く感じる瞳は大きかった。

日本と欧米人のハーフっぽい顔立ちで、可愛らしいという表現がピッタリな14〜5歳位の女の子だった。

突然『顕現者』等と呼ばれてしまったが、出現した時に人を超える力によって争いを鎮め、神の御業を顕現させる者として顕現者という肩書きが付いたらしい。

名を名乗って呼び方を改めさせようと思ったが、恐縮しきりだったのでとりあえず保留にしておいた。

「何かご入用はありますでしょうか？」

「ん〜コーヒーってあるかな？」

「コーヒー……で御座いますか？ 申し訳ありません。コーヒーが何なのか分かりかねるのですが……」

「ん？ ああ〜そうか……じゃあ何か落ち着く飲み物もらえるかな」
「畏まりました」

そう言って、緊張しながらもどこか嬉しそうに紅茶らしきものを

差し出して来た。

どうせならとかなり強引にカティに同席させ、一緒に紅茶らしき物を飲んだ。

マレーナに話を聞いたが、正直荒唐無稽すぎて推論の取っ掛かりにもなりやしない、情報が足りないので考察より観察と周りに目を向けたが、ふと自分の私物はどうなったのかが気になった。

「そういえばカティさん。私の服とかはどうなったのかな？」

「服や持ち物でしたらこちらに纏めてあります」

そう言って示されたウォークインクローゼットの中には、革靴と背広などの衣服、携帯電話と太陽光発電式の腕時計、暗証番号ロック付きのアタッシュケースと少し大きめの工具箱が置いてあった。

とりあえずアタッシュケースを開けると、ノートPCとコピー用紙、営業の資料、A4ノート、メモ帳、定規やペン等の筆記用具と計算機が入っていた。

A4ノートに先ほど耳にした固有名詞とその意味を記入したのだが、カティの視線を感じ顔を向けてみると、ペンや紙を驚愕の表情で見つめていた。

部屋の中を観察しようと席を立ったのだが、カティが慌てて席を立ったので、落ち着かせる為にコピー用紙を一枚取り出し、ボールペンやら蛍光ペンやらを渡して席に座らせた。

カティが興味深々で文字を書いているのを見届け部屋を観察すると、あらゆる所に違和感を感じた。

部屋の中には電灯等の照明器具が無くコンセントも見当たらない、やたらと装飾が華美な部屋だったがどこか古臭く、窓のガラスは曇っていた。

あれこれカティに質問を繰り返したのだが、机やベット、扉や窓等の名詞は日本語と同じだった。

判断材料が無い為、紅茶らしき飲み物の名前を尋ねたのだが

「コレですか？ クアラ茶ですよ」

「そ、そう……美味しかったよ」

「有難うございます」

ニツコリと微笑み返答された。

そもそもお茶の名前等知らないので意味が無かった。

流石に嫌な予感を感じ始め窓を開けて外を眺めると、この部屋は高い場所にあるらしく外の風景が一望出来た。

「ね、ねえ……電気とか電話とか冷蔵庫とかって知ってるよね」

我ながら変な質問だと思いつつも、YESという答えを期待した。

眼下に見える敷地内を、西洋風の鎧らしき物を身に纏った騎士だか兵士だかが隊列を組んで行進していた。

少し離れた所に見える街道は石畳が敷かれ、その街道を幾つもの馬車が往来し、その隣を野菜を積んだ荷車を引く人が街道沿いの店らしき建物に入っていた。

街灯は見えるも電灯なのかランプなのか分からず、一望できる景色全てに目を向けても、電柱も送電鉄塔も存在しなかった。

「えーっと……デン……？ 済みませんどれも聞いたことがありますせん」

「……そ、そう」

私はやたら暗い表情になったらしい、カティが申し訳なさそうな顔を浮かべた。

「は、ははは……そうか……」

「え？」

呟いた声は小さすぎて、カティには聞き取れなかったらしい。

カティの返答を聞いた瞬間理解した。

ごく決められた範囲内に電柱が無いのはまだ分かる。

時代劇の撮影現場のような場所や、そういった雰囲気が必要とするアトラクション施設かレジャーランドの可能性だ。

しかし、そういった施設であっても、角度や位置によっては電柱等が見えてしまう。

電柱は企業努力の結果隠せたでしょう、それでも遙か彼方まで広がる平原や、目の前に見える山や丘や森等、視界内の全てから、送電鉄塔を排除するのは不可能だ。

特に市街地でないのならアレは何処を見ようが目に入る。

遠方に電力の送電する為に、安い土地を選んで建てられるのだから。

——ドサッ！？

「ははは……」

「ど、どうされたのですか！？ 大丈夫ですか！」

膝が笑い窓際で力なく崩れ、その場で尻餅を付いた。

慌ててカティが駆けつけてきて背後から上体を支えてくれた。

こういう場合、もっとわめき散らすもんだと思っていた。

理不尽で不可解だからどうにか理解しようと、若しくはどうあっても理解したくないとばかりに、近場の人間に詰め寄るもんだと思っていた。

「そうか……ははは」

「だい……きやつ！？」

片手の掌で両目を押さえ上を見上げると、全ての力が抜けてしま

った為カティを巻き込んで後ろに倒れてしまった。

悔しいかったり悲しかったり等、停滞に属する感情や思考は人の顔を俯かせる。

憎悪や邁進、向く方向は逆でも決意ある行動に属する場合前方を睥む。

夢想や希望や郷愁、形や道筋の無い思いを描いたとき人は上を向く。こういう場合でも上を向くんだなあ等と、割とどうでもいい事を思っていた。

私が感じていたのは『諦念』だった。

第2話：昔話

私は、異国の何処かに不可解な原因で連れてこられたと考えていた。

しかし現実には、言葉は通じるという不可解な現象を伴って、4次元的に異国の過去に飛ばされた。

辛うじて嗚咽は出さなかったが、涙がとめどなく溢れた。

不可解で理不尽な現象によって帰還不可能な場所に飛ばされた。

仕事を失い、戸籍を失い、家族を失い、そして、惚れ込んで付き合ってた愛した恋人の優子を失った。

これで立身出世でもすれば物語的には痛快活劇なのかな、等と埒も無い事を思ったが、当の本人にとって見れば悲劇以外の何者でもなじゃないか。

私が泣いている事に気がついたのだろう、カティが私の頭に腕を回して来た。

心が折れそうだ、いや、もう既に折れたかも知れない。

小さい頃に虐められた事があった。

ある時一念発起して反撃した。

それ以降負けず嫌いになった。

大人になり社会に出て就職し、上司にどやされても得意先の社長にクレームを叩きつけられても『金稼いだら勝ちなんじゃ!』とばかりに、成績に悩みながらも奮起しそれなりの収入と地位を得た。

それでもこの理不尽さは埒外過ぎると思った。

そして、愛している優子にもう逢えないという事が悲しかった。

そのことに思い至ると、今まで出なかった嗚咽が漏れ出した。

全てが虚しくなった。

どの位時間が経ったのか、結構な時間カティの腕の中で泣いていた気がする。

泣き止んでもそのまま黙って2人床に横たわっていた。

私が考える事を放棄し、カティがそれに付き添った、というのが正確な所だったかもしれない。

暫くそうやって無為な時間が経過したが、流石にカティに悪いと感じ始め立ち上がった。

「……なんというか……申し訳ないというか……ありがとうというか」

「いえ、お気になさらないで下さい」

そう言って柔らかな微笑を返してくれた。

席に戻り、改めてクアラ茶を頂こうと思ったのだが、持ち上げたカップの中のカアラ茶が波打っていた。

未だ無意識に焦燥か恐怖か不安か抱えていて、そのために手が震えているらしく『どうにも弱いな』そんな呟きが漏れた。

流石はメイドというか気配りが行き届いており、そんな姿を目ざとく見つけ自分の席を私の隣に移動させ、膝にいていた私の左手を両手で包んでくれた。

不思議とというかやはりというか、手の振るえは止まった。

「……ありがとう」

機微に聡いのか返答は無く微笑みを返すに留まった。

会話も億劫だと感じるのに人恋しい、そんな不思議な感覚を感じていた。

一時的な鬱なのかも知れない。

もつとも、こんな事に見舞われて平常で居られるはずがないな、と幾分開き直った。

暫くして若干気持ちが落ち着いてくると、色々と考え始めた。

それでも、これからどうなるのか、取り得る手段が限られた中で自分はどうしたいのか等、理路整然とした考察というより、感情コン

トロールや哲学的な思考に没頭していた。

カティと他愛の無い話をし、無理を言ってカティと一緒に昼食を食べた。

依存かも知れなかったが、年端も行かない女の子に甘えるというのを情けなく感じた。

しかしその気配りは不思議と包容力があり、温和な雰囲気も心を幾分か落ち着かせてくれた為、正直有難かった。

出来るだけ隣に居て欲しかった。

西の空が茜色に染まりだした頃、一時的にせよ若干復活を果たした。恐らく今夜は泣くと思う。

そんな訳で、カティの知りうるこの時代の事を教えてもらおうと考えた。

思考は纏まらないかも知れないが、カティの話を聞く分には気持ちに安らいだから

「この辺の事何にも知らないから教えて欲しいんだ」

「んゝそうですね、じゃあこの国の成り立ちを離しますね。ローランド大陸にハルトヴィック王国が誕生して1253年、それ以前はガリア帝国の占領地でした。700年に渡るガリア帝国の支配に疲弊しきった住民の中で――」

「ちょ！ ちよっとまって」

この時ばかりは『相手の話を遮るな』という経験則すら放棄した。

「ちょっと待ってね、そのガリア帝国って所がローランド大陸を700年？ 占領してたんだよね？」

「はい、正確には728年ですね」

「うん、728年経った時に、戦争したか交渉か知らないけど独立して、それから今まで1253年経過してるの？」

「そうですよ？」

「何かおかしいですか？」

「おかしいって言うか……」

カティの話を纏めると、ガリア帝国という国がローランド大陸を支配した年を基点にすると現在は1980年という事になる。

私は1976年生れ、今日本に34才という私が居る事になる。それは良いとしても、ガリア帝国なる国もローランド大陸もその中の国も今日はじめて聞いたのだ。

今と昔では国の名前が違ったりするのはよくある事だ。

そもそも日本ですら大昔は『大和』だったのだから、侵略や独立または合併等、様々な要因で国名は変わる。

だからこそ、ハルトヴィック王国等も、昔あった見知らぬ国が現在は名前が変わった国かと思っていた。

しかも20世紀にしては導入されている技術も文明も遅れすぎている。

終点の1980年を中世に合わせると、先ほどの基点は紀元前900年前後になってしまう。

その頃外洋に出るような船など作れただろうか

「ご、ごめん。知ってる一番古い歴史から教えてくれないかな」

「ああ、そうでしたね。その方が分かりやすかったかも知れません。申し訳ありません」

「いや、いいんだ」

「何年前かはハッキリしませんが、この世界の創世期と呼ばれる時代、色んな土地に雑多に色んな人が暮らしていました。その次に訪れたのが暗黒期、一般的には暗黒時代と呼ばれています。その頃になると種族の住み分けがハッキリ分かれていたんですが、それぞれが領土拡大を狙って、そこかしこで戦争が起こっていました。その次に訪れたのが侵略時代です。この時にある地方に固まって住んでいた魔族が――」

「っ！」

「え？ えっと何か問題ありました？」

「い、いやいいんだ……続けて」

話がおかしな方向へ進みだした。

なぜ宗教の話になり始めたのか疑問だったし、またしても嫌な予感が駆け巡ったが、今回こそは全ての話を聞いてからだと自分に言い聞かせ続きを促した。

「えーっと、魔族が勢力を拡大し、今から凡そ2500年前ガリア帝国を成立させました。そして侵略を繰り返し1980年前にローランド大陸を支配下に収め、世界の2／3を支配する大国になりました。言い忘れていましたが、竜種が支配するロード皇国という国があり、創世期からずっと存在し続けていると言われてます。世界の1／3を支配し、侵略はせずに侵略者の迎撃だけを行っているそうです。ロード皇国の皇帝は、ハイエンシントドラゴンという純粋な竜種で、永遠とも言われる寿命を持ち、生きた年数と共に力も知識も増していくと言われてます」

余りの事態に考えるのを中断し、聞いただけでは覚えられそうも無い歴史を必死にノートに書き出していた。

「それでガリア帝国とロード皇国という2大国家のみになったのですが、今から1256年前、ローランド大陸の西に、いくつかの島が連なった土地があるのですが、そこで奴隷として扱われていた海洋族が独立戦争を起す動きを見せました。そしてそれに呼応するように、ローランド大陸で同じく奴隷として扱われていた、人類、獣人、エルフ、ドワーフが、ヘレナという女神の指導で仲間を集め、独立戦争を起しました。そして3年後の1253年前に海洋族共々独立を果たしたのです。そして、獣人は人間と住処を同じくし、同化を

果たしました。今ではそれぞれの貴族以外では純粋な人や、純粋な獣人というのは少ないかも知れません。生まれるときの血の性質によって、どちらの種族の特徴が色濃く出るかは決まっています。そして、エルフとドワーフは繁殖能力の低さもあって、一部生活に同化していても、婚姻や出産となると同族同士が多く、エルフはモルダウ国を、ドワーフはドロイゼン国を治めています」

余りにも荒唐無稽すぎる話だった。

タイムスリップに嘆いた数時間後には異世界転移でしたというオチ。なにか開き直り始めた。

そうか、異世界転移だったか。

そもそもタイムスリップだって作り話じみた事だったんだ、もういまさら事実が異世界転移でもおかしい事じゃない。

「ちなみに魔法とかってあるの？」

「ありますよ」

ははは、平然と応えられた。

「アレ？ 帰れる？ あーっと召喚とか送還とか、異世界から呼んだり送ったりとかいう魔法ってある？」

「えーっと、そういった魔法は恐らく無いと思います。水・氷・風等を層にして盾にしたり、それらを相手に飛ばしたりする物とかですの……恐らくですが」

「あぁーぬか喜びだったか」

「申し訳ありません……」

「あ、いやいや」

「少しだけ沈黙が続いたのだが『そういえばぬか喜びって言葉の意味しってるのか』と尋ねたところ『聞いた事がない言葉ですが、表

情等からなんとなく意味は判りました』との答えだった。

それ以降、なにかしてないと変になりそうだったので、矢継ぎ早に質問し精力的に現状をまとめた。

ローランド大陸は、元はハルトヴィック、モルダウ、ドロイゼンの3ヶ国で占有していたが、独立から約1100年、長く続いた平和は秩序とモラルの低下を招いた。

犯罪率が増加し公共良俗が軽視された。

そして不作の年が3年続いた150年前、当時のハルトヴィックの王『デイドリッヒ・フォン・ハルトヴィック』その弟達、次男の『コンラッド・フォン・ハルトヴィック公爵』3男の『ミハエル・フォン・ハルトヴィック公爵』が自分が王になろうと牙を向いた。コレは誰が悪いとか善いとかを明確に区別出来る物ではなかった。デイドリッヒ王も決して無能というわけでもなく、放蕩を尽くすわけでもなければ暴君でもなかった。

平和な時代にあつてのモラルの低下というのは、地球の歴史を顧みても避けられない事態だ。

ただ単に、時代や国を維持は出来ても、力強く先導するまでの力量が無かったという事だ。

そういった現状を打破しようと、次男のコンラッドは女神ヘレナを崇めるヘレナ教の教皇を後ろ盾にし、武力を以って覇権を唱えた。コンラッド自身は信念と責任感から立ち上がったのだが、若干直情径行が強く、教皇の甘言に乗ってしまったと言う感が否めなかったらしい。

それに確かに野心も持っていたらしい。

教皇については諸説紛々あるが、現在の主流の説は権力欲だろうとの見方が強いとの事だった。

もしかしたら、独立を促したヘレナ神を再び強く喧伝し国内のモラルの向上を図ろう、という考えだったのかも知れないが、今となつては真実を知るものは居ない。

そして、王の玉座に座れなかったコンラッドは、教皇の後ろ盾も有

った為に自らを皇帝と名乗った。

その際、王族との絶縁を示す為、ヘレナ教の大聖堂があるローゼンバークを姓として改名し、支配する地域をローゼンバーク皇国と称した。

同じ頃3男のミハエルは、温和で理知的な性格らしく、戦争を起すのも参加するのも臣民を苦しめるのみだと発言した。

ディードリッヒが正当な王として恫喝や説得で再統一を図ろうとするのに対し、コンラッドは武力によって再統一を図っていた。

そしてミハエルは、論理と交渉によって戦争の終結に苦心したが、ディードリッヒもコンラッドも、もはや引けぬ状況になっていた為、ミハエルは苦渋の選択を迫られる事となった。

ミハエル自身も若干の野心と、現状の打破に対しての強い信念を持っていた。

そこで、自分が納める領土を国家として独立させるべく、工作を図った。

ディードリッヒと共闘して、コンラッドを打倒し、その後にディードリッヒを補佐し統一させる、という道もないではなかったが、愛妻家で知られるミハエルは王家に対し若干の反意を抱えていた。

ミハエルの妻アンネリーゼは、結婚して姓をハルトヴィックに改名したが、元はベルガー姓を名乗るベルガー侯爵家の令嬢だった。

結婚以前から、妻の生家であるベルガー侯爵家は王族からいささか冷遇されていたのだが、ミハエルは王家の反対を押し切った結婚だったのだ。

結婚後もベルガー侯爵家に対する待遇は改善される事は無く、そういった背景により王族に従順に従ったり、協力や補佐という考えは放棄した。

ベルガー侯爵家は王族や中央の貴族諸侯から冷遇されていたが、領土周辺の貴族諸侯や臣民等からは親しまれており、それに加え、創世期から信仰されていた多神教である『プロメテウス教』をベルガー侯爵家が信仰していた事で、プロメテウス教の一部と、周辺の

貴族諸侯の後ろ盾を得た事で独立を決意した。

その際、ベルガー侯爵家を冷遇していた王族に連なる者としての誠意を示す為と、その王族からの決別を示す為、姓をベルガーに改名し、領土をベルガー公国と称した。

戦争によってディードリツヒとコンラッドの両陣営が疲弊した。

これ以上の戦争は臣民の暴動に発展し、国家と秩序の崩壊に繋がる懸念したミハエルは、2ヶ国の属国化か若しくは、交渉によっての共和国化、最悪でも協定を結んだ友好国の樹立を目指した。

その上で、疲弊しなかった強みを生かし徐々に吸収すればいいと考えた。

領土内に山やそれに伴う鉱山等の地下資源が無く、独立前は武器等が不足していたが、領土の大半が平地で穀物に関しては豊富に生産可能だった為、それを対価にした貿易協定を構想し、相手国として武器製造に定評のあるドワーフが収める隣国の『ドロイゼン』と結ぶ事によってこれを解消した。

物資や兵力の確保が整った後、ディードリツヒとコンラッドが戦争を開始したのを見計らい、コンラッドの領土を背後から強襲した。

この事によりコンラッドは、勝つ見込みの無い兵力分散による2正面作戦を主体にした戦略をとるか、同じく、最終的には負ける公算の高い、各個撃破作戦を主体にした戦略をとるかしくなく、身動きが取れない状態で停滞し、一時的な平和が訪れた。

しかし世代交代を果たしたローゼンバーク皇国は、手段が目的になってしまったかのような強硬な徴兵制策を行い、短いサイクルで安定期と侵略期を繰り返し、ベルガー公国を牽制しつつ、ハルトヴィック王国に再び戦争を仕掛け始めた。そしてそれが現在50年続いていた。

長く続く戦争で国は疲弊し、税率が上がり臣民は貧窮していった。このまま行けばハルトヴィック王国は余命10年余りといった状態だった。

そこまで質疑応答を繰り返していると、いつの間にか夕食の時間に

なっておりメイドが入室してきた。

「顕現者様、マグダレーナ様が夕食にご招待したいとの事ですので、食堂お召し上がり下さい。カティに案内させますゆえ」

「分かりました。お一緒させていただく旨、マレーナ王妃様にお伝え下さい」

「畏まりました」

第3話…示された道

案内されたのは荘厳な印象のする食堂だった。

壁には絵画が幾つも飾られており、やたらと細かいシャンデリアが下がっていた。

目の前には上座正面に2席、両側を10席づつ、下座の裏正面に2席の計24名が同時に座れる大きなテーブルが置いてあり、テーブルの上には銀の食台がいくつか並んでいて、既にテーブルにはナイフやフォーク等が並んでいた。

「……すごい……大きいな……」

思わず感嘆の声が漏れたのだが、カティは苦笑しながらコレでも一番小さい食堂なんですよと教えてくれた。

「うへえ……」

初対面の上に上品な人たちとの対面だった為、極力口調は営業モードで通してきたのだが、再び思わずもれた妙な声にカティはクスクスと笑っていた。

薦められた席に着席し机を見ると、上座に1名自分の正面に1名が座るように食器が並べられ、その配置から王か王妃のどちらかと、王子か王女かまた別の誰かだと推測出来た。

程なくして現れたのはマレーナと女の子、年の頃から王女だろう。

「ご招待有難う御座いますマレーナ王妃様。それと始めまして、私は田中圭介です」

「お待たせしてしまったようで……招待をお受け頂き嬉しく思いますわ。この子はわたくしの娘のクリスティーナです」

「初めまして、ハルトヴィック王国の王女、クリスティーナ・フォン・ハルトヴィックです」

フォークやナイフは外側から使うとか、実践できるかどうかは兎も角基本的なテーブルマナーは知識として知っていたが、見慣れぬ果物やソースやら食べ物やらが多かった為、緊張した上に閉口した。それとクリスティーナが終始無表情だったのが気になった。

「これはハルトヴィック名産のドロテアのステーキなんですよ、召し上がってみてください」

今までは2人の食べ方を見ながら真似していたのだが、ここに来て初めて『先陣を斬れ』と仰せつかった。

私に対する嫌がらせなのか、なぜかメインの皿の中にはステーキの隣にサラダらしきものが付け合わさっており、ご丁寧に白いソースと茶色いソースもだされた。

恐らく白いのはフレンチドレッシングに似た何かだろうと当たりをつけて、茶色いソースをステーキにたらしした。

「「あっ!?!」」

2人とも声を上げたのでとても嫌な予感がしたのだが、失敗を教えないというテーブルマナーにあっただろうか、顔を上げて二人の顔を見たのだが、マレーナは顔を逸らし、クリスティーナはプルプル震えながら、努めて無表情を維持していた。

「!?!? ……………お、美味しいですね」

「「プッ!」」

甘辛酸っぱかった。

どう考えても茶色いのがドレッシングだ。

「あ、新しいのを持ってこさせますね、……ふふふ」

「ああーっと、いえこのままで構いません。私の所では『食べ物は粗末にするな。出されたものは綺麗に食せ』という格言がありますので」

そう断りを入れて、ナイフで削ぐようにドレッシングをサラダに移植した。

真面目な事を言ったので回復したかなと思いクリスティーナを見たのだが、俯いて笑いを我慢する努力を続けていた。

「それで……状況は理解していただけたでしょうか？」

食事も終盤に差し掛かり、マレーナが質問してきたので素直に返した。

「はい、カティに教えてもらったので状況は掴めました。その上で質問なのですが……今後私の扱いはどうなるのでしょうか？」

マレーナが表情を締め、クリスティーナが身を硬くしたのが分かった。

一体何事が起こるのか

「率直に申し上げます。圭介様には『顕現者』という肩書きを持たままハルトヴィックの王族になって頂く為に、婚約後出来るだけ早期に婚姻して頂きたいです」

流石に目を見開いた。

色んな可能性を考え、可能性の一つとしてはあったが、低く見積も

つていたうちの一つだ。

カティから聞いた感じでは、神と人を取りなす者、若しくは神と人との中間に位置し神の意向を知らしめる者、とした感覚を得た。

ローゼンバーク皇国がヘレナ教によっての統一を大儀に掲げる以上、顕現者を抱え込むのは強力な牽制となる。

しかしそれは、単に陣営に就く程度の事だと考えていた。

「えーっと、ハルトヴィック王や周りの方々の反対とか出なかったのでしょうか？」

「王は半年前に倒れ、先月他界し現在は鬼籍に入っております、王も4年前の戦争で命を落としていますので、ハルトヴィック家として残っているのは、わたくし達だけなのです」

「それは……ご冥福をお祈りいたします」

「有難う御座います」

「心にも無い事を……」

「ティーナ！」

小さい声だったが聞こえるように言ったのだろう、まるっきり聞こえてしまった。

「私は当人同士の感情によって婚姻を結ぶという生活環境の中に居ましたので、未だ釈然としない部分があります。決して不満なわけではありませんが……美男子でもありませんし、実が伴ってない『顕現者』という他称があるのみです。お二方はそれで宜しいのでしょうか？」

マレーナはクリスティーナを気にし、クリスティーナは我関せずなのか消極的賛成なのかそっけない態度だった。

「王族になるというのが実を伴うものか形だけなのかは兎も角、婚

約するに当たってどう呼びすればよいのでしょうか？ マレーナ王妃様のままでよいのでしょうか？ それともマレーナ王女様になるのでしょうか？

「……は？」

「あれ？」

2人共『ナニッテンダ？ コイツ』という表情を浮かべていた。私もさっぱりわからない、見た事も無い女性と結婚するのだろうか、それともまさかクリステーナか、31歳と14〜5歳というのは離れすぎじゃないかとおもうのだが、それとも政略結婚とはそういうものなのか。

「えーっと……誰と婚約するんです？」

「ふふふ……いやだわ、おからかいになってはいけませんよ……娘のティーナです」

見ると『何か不満なのかコノヤロウ』という目でこちらを睨んでいた。

あくまで想像だが

「えーっと、婚約者がこんなオジサンで申し訳ありませんが、婚約に関しては色々ハッキリさせてから決定しようと思います。クリスティーナ王女様」

「「オジサン？」」

「あれ？」

どうにも先ほどから話がかみ合わない。

一体何なのか

「……私の事は何歳に見えます？」

「……14、5歳に見えますが……」

マレーナの答えに疑問符を浮かべつつ、クリスティーナに目を向け返答を求めると

「15歳には見えません。13歳か14歳に見えます」

「……鑑はあるでしょうか？」

マレーナに指示されたメイドさんが持ってきた手鏡を覗き込むと、子供の私が居た。

「なんでやねん……」

「「え？」」

マレーナもクリスティーナも『一体なんなのだ?』という疑問の表情を向けてきたのだが、暫く黙って考えを纏め、これから3人で内密な話をしたいので、盗み聞きの恐れが無い部屋は無いかと尋ねると

「それでしたら、先ほどまでお休みになられていた寝室が一番適しております」

その為3人で寝室に移動した。

給仕を終えたカティが退室し、部屋の中に居るのが3人だけになると私は徐に口を開いた。

「まず……色々お話する前に、尋ねたいことがあります。正直に答え頂きたいのですが」

「はい、わたくしに分かる事でしたら、立場の許す限り正直にお答えいたします」

私が聞きたい事、それは今後の私の扱いの正確な所だ。

王族の一人として戦いに参加するのか、それとも王として率いるのか、また、そのどちらかであったとしても、その扱いが私の寿命が尽きるまで恒久的に継続されるのか、それとも国が安定しどこぞの貴族から婿養子招き、正当な王として立脚するまでの繋ぎなのか、はたしてどういう扱いなのか、という事だ。

「王族の一員としてだったり指示に従うだけの王ならば、何処までの自由が許されるのか聞いた後従いましょう。街に行くとか、城内を歩く等すらも許されない、奴隷のような扱いなら、それを改善するべく交換条件を考えて用意しましょう。実権を握れというなら、その努力をしましょう。しかしそれが恒久的なものではなく、ある時期から私の存在が不必要になり、何処かの貴族の方が王女と婚約し、その結果私が邪魔になるようなら、ローランドどころかガリア帝国すらも関与しない場所、私が元居た場所に帰る努力をしておきます。私が帰れば、例え邪魔になったとしても『顕現者は後任に託して神の国に帰還した』とでも触れ回ればよいでしょう。なので、どういった立場のどういった立ち居振る舞いを求められているのかを知りたいのです」

こういった質問をしているのは、逃げ出す為等ではない事を説明した。

その言葉を聞きマレーナは、国が疲弊して貴族諸侯の離反が増えだしているのです、何処からか婿養子を招きいれる事は無いと断言した。友好的な閥と反抗的な閥との心情的な差を広げる事はしないとの事だった。

友好的な貴族とさらに友好的になれたとしても、若干の反意を持っている貴族の閥が、さらに反意を大きくしたのでは、いずれ離反してしまい国力や兵力が減少してしまうし、国が安定した後でもその

頃になれば『顕現者』の地位の確立が成される為、王として実質的な要人となるという事だった。

「圭介様の能力やその方向性によっては、指示に従ってもらうのか、率先して指示して頂くかは変わってきます。ただし、街を見てまわったり、城の中をみてまわったりなど、大凡生活に支障をきたす様な制限は致しません」

生涯に渡り王として存在するならばどちらを望まれているのか、実権を持たせるという事は指示する以上の能力があるという事を認めた場合だ。

それならば、実権を握らせるほどの能力と実績を示したほうが望まれる事ではあるが、しかしながら、発言力とかパワーバランスとかそういったことを考えると一概には言えない。

「知識やそういった能力をお持ちであるのなら、それを示して頂き実権を振るって頂いた方が王国としても望ましく思います」

と望まれる方向性は示してもらったものの、そんなものを持っているわけが無い。

ちよっと先の技術や知識を、学校で習い営業の仕事で聞いたり実践したりした程度だ。

国家運営など出来るわけが無いし、そもそも、この状況の理不尽さに憤りを感じ、優子との唐突な離別で感じる無気力感を感じている。正直自分がどうしたいのかさっぱり分からない。

そして、暫く状況を噛み締めた後自分自身の事を伝えた。

人類以外に文明を持つ知的な種族は存在せず、人口は60億に上る大きな世界であり、科学技術の発展に伴って、より高度な社会を形成している。

そういう所謂異世界から唐突にここに来てしまった事と、実際は3

1歳で、家族、友人、恋人、その他命と意識以外の全てを一举に失ってしまい、憤りと無気力感を感じている事等、今現在の正直な気持ちも含めて打ち明けた。

「それで先ほどは無様にも涙を流して、カティに慰められてましたがね」

「……そう、ですか……」

憐憫というか同情というか、何と言っているのか分からないといった感じの表情を向けてきた。

珍しくクリスティーナの表情からも陰が取れていた。

そういった事情もあり、気力さえ充実すれば指示には従うし努力もすると思うが、と気力が戻るかどうかについては言葉を濁して説明した。

「今しばらくは予定もありませんので、ゆっくり静養なさってください」

第4話…一念発起

マレーナ達と夕食を共にした夜から、私は強烈な孤独感と虚無感に襲われた。

夜になり寝室で一人になった事で、慌しかった事態にもようやく気持ち追いつき、全てを失ったという事に悲しみを感じたのだ。

その日から2日間、凡そ能動的と言われる行動は一切せず無為な日々を送った。

日中でも部屋から出る事も余り無く、カティが部屋に待機していたが特に会話するでもなく、窓からの景色を眺め続け、夜になれば孤独感と寂しさに襲われ、寝付けないまま朝を向かえた。

そんな生活を続けていた2日目の夜、寝付けなかったので気分転換にと城内を散策し始めた。

考えなしに歩いていたら迷ってしまったのだが、ある部屋から光が漏れているのを見つけた。

夜警の衛士かと思ったのだが、どうやらそこは執務室だったらしく、マレーナが政務をこなしている姿が見えた。

やはり国家運営という重責は心身共に疲弊させるのか、その顔は明らかに疲労が浮かんでいた。

「っ！ ……」

昔は若くして結婚するのが普通だった。

マレーナも、恐らくは10代で結婚や出産を経験したのかも知れない。

見た目的には20代中盤だったが、多く見積もっても私と同じくらいだろう。

まだまだ若いマレーナに、扶養されているといっても過言ではない今の状況が情けなかった。

「やるか……」

そう呟いて、静かに寝室に戻り構想を練り始めた。

「おはよう御座います、カティさん。唐突では御座いますが私の先生になってください」

「ふえっ！？ 私がですか？ 一体どういった……？」

「はい、話は出来るようなのですが、その辺の書物に目を通したら文字が読めない事が判明しました」

「はぁ……左様ですか……」

翌日からカティに教師を頼み、文字の習得に取り掛かった。

若干ふざけ半分ではあったが、教師なのだからとカティに対しては幾分かフランクになり掛けていた言葉使いを敬語に戻した。

「練習で紙使うの勿体無いか……？」

この世界で一般的な書物というと羊皮紙らしく、初めて見たのが幾分かゴワゴワしていた。

少し考えた後『砂に書けばいいじゃないか』と思いつき、浅い箱を探したのだが銀のトレイ等無駄に高級な物しかなく、ないなら自分で作ろうと思ったのだが、将来の王はそういう事はしちゃいけないらしかった。

仕方なく製作を依頼しておき、今日はコピー用紙での書き取りとなった。

「形は違うけど、これまで使ってた文字と使い方は同じだね」
「そうなんですか？ それでしたら覚えやすいですね」

それぞれの文字の形状は違うのだが、日本語のひらがなと同じ形式だったのは大変助かった。

カティに見本として書いてもらった文字を見ながら書き取りの練習をし、ある程度自分で練習を進められるようになると、書きながら話を聞くので重さや長さの単位やお金の単位等、一般的な基礎知識を教えてくれと頼んだ。

「重さで一番軽いのは1ミグです。1000ミグで1ゴートミグ、長さは1メルで同じく1000メルで1ゴートメルになります」

重さがミルで長さがメル、1000になるとキロと同じようにゴートという単位が追加していく方式だった。

「じゃあ1000ゴートミグと1000ゴートメルは何になるの？」

「そのまま1250ゴートミグ等と呼ぶ場合もありますが、それぞれ1ゴルミグと1ゴルメルになりますよ」

そもそも1ミグの重さや1メルの長さが分からないので判断しようが無く、後々基準となる物を教えてもらおうと考えた。

「お金ですが、単位はグロスとリマです。コレですよ」

そう言ってカティがポケットから取り出したのは、大小の鉄と銅の硬貨だった。

「この鉄の小さい硬貨が1グロスで、大きいのが10グロス、100グロスで1リマとなります。小さい銅貨が1リマ、大きい銅貨が5リマでコレより大きな銅貨があるんですが、それは10リマです。この上に大小の銀貨で20リマと50リマ、大小の金貨で100リマと300リマがあります」

文字の書き取りをしていたのだが、次々と飛び出す単位にそれどころではなくってしまい、ワタワタとノートにまとめ挙げた。

重さがミグで長さがメル、千になるとゴートが付き、そのまた上だとゴルが付く。

貨幣単位はグロスとリマ、100グロスで1リマとなり、小鉄貨1グロス、大鉄貨10グロス、小銅貨1リマ、中銅貨5リマ、大銅貨10リマ、小銀貨20リマ、大銀貨50リマ、小金貨100リマ、大金貨300リマとなる。

こちらの貨幣はドルの形式に近いようだった。

「あ、あははは……す、すぐに慣れますよ」

「まあ、がんばります」

眉間にシワを寄せ、しかめっ面をしていた為かカティが苦笑しながら励ましてくれた。

そうやって基礎知識を入手し始めたら、一般常識だと思われる色々な情報が必要だという事に改めて気がついた。

「あとさ、町の人の収入とか貴族の収入とそれぞれの一回の食事の費用を知りたいのと。世界の地図と大陸の地図、それとハルトヴィツクの地図を見たいんだけど大丈夫かな？」

「え、えーっと……ハッキリと断言出来ませんので、地図も含めて執事長に尋ねてきますね」

「あ、明日でいいよ、他にも聞きたいことあるし」

その後書き取り練習そっちのけで、果物やら動物やら固有名詞を書き連ねて一日が終了した。

「今日は有難う御座いました。また明日もよろしくお願いします」

「い、いえ……お役に立てて幸いです。……あの……出来れば口調を戻していただけないでしょうか？」

「ははは、居心地が悪かったか……わかった」

「はい」

翌日、地図の件については希少書物な上に現在はマレーナが執務室で使用しており、横で閲覧しろとの事だったので邪魔にならないかと心配したのだが、とりあえず見せてもらう事にした。

「コレですか……正確性はどのようなのでしょうか？」

「正確に書かれていると思いますわよ」

始めに世界地図を手に取り眺めてみた。

地図の東側には南北に渡り縦に長い大陸があり、これが竜種の治めるロード皇国の領地となっていた。

地図中央の南側にクリムパンの様な形をした大陸があり、これがローランド大陸だ。

その西側には海洋族が治める、点在した島々のアステイル公国という国が存在していた。

地図の北西に一際大きな大陸があり、この大陸とロード皇国との間にあるワンド島、ローランド大陸との間にあるヨーク島を含めた領土がガリア帝国領に当たるようだ。

パツと見はガリア帝国45%、ロード皇国25%、アステイルとローランド大陸がそれぞれ15%といったところだろうか。

その後ローランド大陸図やハルトヴィック王国図等に目を通すと、自分の知る現代の地図ほど精密ではなかったが、海岸線や国境線等がそれなりに細かく描かれており、ある程度の信頼性は得られるようだった。

しかし、その地図の測量情報を纏めた書物に目を通すと、結構大雑把に計算されているようで、街と街との距離が凡の数字になって

いたりした。

「有難う御座いました。それとこの他にもお願いしていた件なのですが……」

「ええ、伺っておりますわ。それらの事に付いてはクリフ爺が詳しいでしょうから、直接お聴きになってください」

そう言ってメイドに指示を与えクリフ爺と呼ばれる男性を呼んでもらった。

現れた男性は年のころ70歳位だろうか、執事姿をしており、温和そうな雰囲気ながらスツキリと背筋を伸ばしており、単なるイメージに過ぎないのだが『英国紳士』という言葉が浮かんで来るほど、上品で知的な上に優しげな印象を受けた。

「お初にお目にかかります顕現者様。私はこの城の執事長をしておりますクリストフ・ヴィンランドと申します。クリフと及びください」

「お忙しい中恐れ入ります。私は田中圭介です」

顕現者と呼ばれることについて一言付け加えようと思ったが、その肩書きの重要性を考え胸に留めておいた。

「早速なのですが、物価とか費用とか金銭的な事を教えていただきたいのです」

「左様で御座いますか」

マレーナの邪魔にならぬよう2人で隣室に移動し、物価や経済状態に関する講義を受けた。

まずクリフからの前提として、現在は戦争が頻発している為国が貧窮しており、それに伴い物価が不安定である事を告げられた。

土地が枯れ始めた事による不作と、長年続く戦争で労働者層が減少した事で作物等の生産量が低下、その為にあらゆる物価が上昇しているらしく、物価の上昇で賃金も上がり、働きに出ている者の1日の給金が4リマとかになるらしい。

街に暮らす者の貧富の差はあるが、材料費だけで見ると1回の食事は凡40グロス位で、貴族の食事費用となるとその差は激しく、大凡2リマ〜8リマ、特別裕福な貴族だと15リマ位いくかも知れないとの事だった。

30日計算で考えると給金120リマで食費35リマ、しかも租税が6割5分だというから一般人の生活の厳しさは計り知れない。

「こうして聞いて見ると随分と大変な生活状況ですね……」

「そうで御座いますなあ……50年以上も昔の事です、私は幼少の頃は戦争も無く市井の者も貴族の方々も平和でゆとりがあったのですが……」

クリフはそう言いながら皺を深くして昔を懐かしんでいた。

それから数日間、ブツブツ呟きながら砂で文字の書き取りをし、時折思い出したかのように経済の略図やら道具の改良案等を砂に書いたり、傍らに控えていたカティに質問を繰り返す等して問題点や改善案を列挙していった。

ある程度形になり始めると、今度は政治的な面で疑問点や問題点などが浮かんできたので、疑問点等を解決するべく再び講義の要望を出したのだが、それならばとマレーナが会食に招待してきた。

私としては政治の事に関係している人間なら誰でも良かったが、本人の意思とその立場を明確に表明していない現段階では、出来るだけ人との接触は控えて欲しいとの事だった。

「それで……お聴きしたいというのはどういった事なのでしょう？」

前回と同じようにマレーナとクリスティーナと私の3人での会食が終わり、食後にクアラ茶を飲みながらの談話の時間を設けてくれた。

「それはこの王国の政治形態が君主制なのか貴族制なのかという事です」

王と貴族が居るんだからどちらかだろうと共和制の話は除外した。王が無条件で命令出来るのか、それとも何人かの人間から許可を得なければならぬのか、それとも法律があるのかを質問した。

その違い如何では、何か行動を起こす際の手順が変わってきたりするからだ。

「そういう分類であれば現在は絶対君主制という事になりますね、ただ貴族の者に許可を取る必要はありませんが、賛同を得られれば離反者が増えてしまいますので、形式上は絶対君主でも実質的には貴族制との中間といった感じででしょうか……」

「成る程……」

話がひと段落してからクアラ茶を口に含み、今後の事に思いを馳せていると、クリスティーナがポカンとこちらを見ているのが分かった。

「どうかしましたか？」

「え？ ……いえ、なんでもないわ」

話についてこれなかったのかそれとも今まで私を見下していたのか、王女の英才教育というのがどういふものなのかは知らないが、とりあえず私に対する評価を改めたのだろうという事は分かった。

「そういえばお2人に贈り物を持ってきました」

「あら？ 何かしら？」

私を利用しようと考えているという事実は兎も角、衣食住の全てを世話になっているのもまた事実だったので、持ち物が殆ど無い中、ボールペンとコピー用紙10枚をそれぞれに手渡した。

「こ、これは随分薄くて白いですわね」

「コッチの棒はなに？」

「どちらも私が居たところの道具です。ソッチの棒はペンですよ」

マレーナは紙の白さと薄さに驚き、クリスティーナは紙に驚きながらもペンに興味を示していた。

キャップをあけてやり、試し書き用に持ってきた紙に書いて見せ、ペンを分解してインクの量等を説明した。

「有難う御座います。大切にに使わせて頂きますわ」

「今日は持ってきてませんでした、まだ他にも道具がありましたので、興味があればいらして下さい」

その数日後にはクリスティーナが顔を出すようになり、王女の来訪によってカティが再び恐縮してしまい、なにやら悔しがっていたクリスティーナが、私の文字の拙さを見て優越感に浸ると

「私の事をティーナと呼ぶ事を許します」

「は、はあ……」

愛称で呼ぶ許しを頂いた。

第5話：王への覚悟

幾日か過ぎてからカティによる書き取りテストに合格し、それと同時に用済みとなり始めた学習砂箱をベランダに設置、中央にペンを立てて日時計を作った。

それと言うのも、日の出が1日の始まりで1日が12時間という大雑把だった為で、12時間という言葉で24時間にも対応させられるだろうと考えたのだ。

その為、作った日時計で自分の腕時計を正午で合わせると、暦についてもカティに質問した。

7日で一週間、4週間で1ヶ月、12ヶ月で1年という計算で1年が336日という事に驚いた。

異世界だから驚く必要は無いのだが、太陽はあるし月はあるし、人々の暮らしぶりは中世欧州だったので、時折見かける異世界らしさというのに驚かされるのだ。

その話の流れで王城の中庭に案内されたのだが、輪が付いている長さの違う幾つかの金属の棒が建っていた。

現在は余り使われていないらしいが月日を観測するものらしく、合計28個の輪っかで円を形成する長い棒と輪っか一つの短い棒、合計12個の輪っかで円を形成する長い棒と輪っか一つの短い棒、それぞれが一セットで機能するらしい。

夜に輝く星の中には、1ヶ月や1年で綺麗に円を描くように移動する星があるらしく、短い棒から長い棒を覗き込んだ時、その星がどの輪の中にあるかで月日が分かるらしかった。

そんな日々の雑事をこなし、気がつけばこちらの世界に来てから2週間が経過していたが、その間起きていた時に一人で過ごすという事が殆ど無かった。

最初の4～5日は常識を知らない為の介護という意味合いが強かったが、初日に泣いてしまったのと自分の事を心情も含めた上で説明

した為だろう、カティは自らが一緒に居ようと心がけてくれたし、ティーナがしょっちゅう訪れるようになった。

ティーナの王女という立場を考えると、恐らくはマレーナの指示か承認があったのだと思う。

カティやティーナと共に過ごす時間が増えた事で他人行儀が薄れていき、昔の自分を思い出し暗い気持ちになるという事が徐々に減っていった。

これには、カティもメイドとして色々と気配りしてくれたし、意外な事にティーナも色々世話を焼いてくれたお陰だと思う。

「ホラ！ 首元はしっかり絞めなさい！」

「ぐええ！ く、苦しい……です」

「まったく……身だしなみはきちんとしなさい！」

「す、すみません」

今日は各種族についての講義だったのだが、ティーナが現れると挨拶もそこそこに怒られた。

高貴な方々の服だからだろうか、どうにも服が着慣れずやたらと堅苦しいので着崩していた。

営業で培った交渉術を駆使してカティを説得、渋々了承してくれたのだがティーナには通用せず、叱責されながら服装を整えると、ようやくティーナも落ち着き講義が開始された。

「どんな種族が居るかに付いては聞いているんだったわね」

「はい」

「それでは始めるわよ」

人類やその他の種族が暮らしていた場所というのは、現在はガリア帝国が支配する北西の大陸だったらしく、竜種についてはハッキ

リ断言できないが、創世期の時代から既に、東の大陸とワンド島（ガリア帝国大陸と東の大陸の間に存在する）を占有していたらしい。暗黒期になると竜種以外の種族は固まって暮らし始め、小さな村だったものが街や都市になり発展していった。

山間部をドワーフが、森林部をエルフが支配し、平野部を獣人が海岸部を海洋族が支配するようになると、身体能力的に一番の弱者である人類は、実りの少ない痩せた土地に追いやられるようになった。生活が苦しかった事で人類は大陸外へと安住の地を求め、現在のガリア帝国大陸とローランド大陸の間にある、比較的大きな島であるヨーク島を発見し移り住んだ。

「外洋に出たのは海洋族が初めてじゃないんだ？」

「そうね、種族の名は便宜的に海洋族と呼んでいるけど、どちらかというと内海が行動範囲ね」

人類は対立種族が居なくなった事で繁栄を極め、遂には外洋船を建設しローランド大陸を発見するに至った。

そして人類がローランド大陸とヨーク島に生活基盤を作り上げた頃、大陸内に魔族と呼ばれる種族が発生し始めた。

「あら？ 最初から居たんじゃないんだ」

「ええ」

魔族の発生起源に関する文献は残っていないらしいが、その発生要因は調べられていた。

憎悪等の強い負の感情に支配されると、悪魔だかなんだか知らないが頭の中に四六時中囁きが聞こえるらく、その内容というのも、負の感情を持つに至った原因を刺激して、感情に素直になれば力を与えるぞ的な誘惑を語りかけてくるらしい。

種族の違いに関係なくこの現象は起こり、その囁きに身を委ねてし

まうと魔族化が起こるらしかった。

この魔族化を『墮転』と呼ぶらしいが、墮転が起こると顔も含め全身に黒い文様が浮かび上がるらしい。

どんな文様なのか尋ねたのだが2人ともよく分からないらしく『分からない事があればクリフに聞け』という城内の格言に従い、執事長のクリフを探し出して書いてもらった。

全ての魔族が同じではないらしいが『微妙に違うだけでコレと似たようなもので御座いますよ』そう言いながらクリフが書き上げたのは、地球で言う所の刺青のトライバルという模様に酷似していた。

「この文様が浮かび上がる他は外見的变化はありませんが、身体能力と魔力が向上するようで御座いますよ」

「んゝ……私も墮転する可能性があるのでしょうか？」

「どうでしょう……私には判断付きかねますが……顕現者様ですから無いとも言えますし。人だから有るとも言えますし……」

流石に全身トライバルは勘弁して欲しい、温和な顔にトライバルの刺青など似合わないことこの上ない。

その他にも魔族になると攻撃性や残虐性などが高くなるのと、万人に対して攻撃的になるので元種族と生活を共にする事は困難となり帰属意識は下がる事。

強いものには従うという力による支配社会を作り、魔族でも種の繁栄という本能はあるのか、他と同じように結婚し子を産むのだそう

だ。
そして驚く事に『帰転』というらしいが、身体能力と魔力の向上というプラスの要因のみを残し、魔族から元の種族に戻る方法があるという事だった。

祭壇に魔方阵を描き対象者をその中に立たせ、術者によって精神に作用する魔法を3日3晩掛け続け、同じく3日3晩対象者を心配する親族や縁者達が語りかけ続け、見事対象者が頭に響く囁きを振り

払い、自分を愛する者達の声に耳を傾ける事が出来ると、薄く残りはするが文様が消え、同時に残虐性等も消えて復帰を果たすのだという。

「帰転した人たちに対する迫害とかないんですか？」

「墮転というのは忌諱されていた事なので昔はあったようですが：今は帰転した者自体が少ないですし、墮転した原因も魔族に対する恨みからというのが殆ど……帰転を果たした後は、帰転の儀式に参加した縁者に尽くす者達ばかりなので、今は迫害というのは恐らく無いでしょうなあ」

クリフがそういつて話を締めくくったので、礼を言って部屋に戻る事になった。

部屋に戻る道すがら、ティーナからその他の種族について簡単な説明を受けた。

「魔族の話が長くなってしまったけど、他の種族も簡単に説明するわね。魔族の勢力拡大で、真っ先に海洋族が追いやられて現在の諸島に避難、次いでドワーフとエルフや獣人も徐々に後退していつて遂には人類に助けを求めてヨーク島に移り住んだわ。当初は反対意見があったらしいけど、対魔族戦を考えれば味方に付けて置いた方が良いつて事になったんでしょね。それで徐々に後退していつて最後には負けて奴隷の扱いを受けた。その後独立を果たしてそれぞれの国を建国、獣人のみは人と共に暮らす事を宣言した。貴族として純粋な種は居るけど、殆どの獣人が人類と生活を共にしたわ。王城で働く者達の中にも獣人の血が入っている人は居るだろうけど、獣人の特徴が色濃く出た人は兵士になってるわね。まあ街には普通に居るだろうけど……それで街の中にはエルフとかドワーフも居るんだけど、結婚は同属同士って意識が強いから、商売はしても永住する人は少ないわね。そう言った事で王城の中では一部人間の貴

族と結婚したエルフとかがいる程度、殆どは外交官の館に居るわね」
「ふむ」

説明が詳しかったので特に疑問もなくすんなり理解できた。
そんな説明が終わり、3人で雑談しながら部屋に向かったのだが、
なぜか話の流れで年齢の話題になった。

「そういえば私の年齢は一体何歳になるのかな？」
「「え？」」

2週間も経ってから今更という感じもしないではないが、色々と
慌しすぎて自分の外見年齢を意識する暇など無く、生活が落ち着き
始めた今になって気になりだしたのだ。

マレーナはたまにからかって来るが、基本的には成人男子として扱
ってくれる。

カティは私の専属になったので、年齢云々の前に『従うべき人物』
としての扱いだった。

ティーナはイマイチ接し方に苦慮しているのか、ケースバイケース
でその対応を変えてくる。

クリフはたとえ30代だろうが10代だろうが対応は変えないだろ
うと思う、クリフにしてみればどちらも従うべき存在として扱うだ
ろうし、年齢だけを考えても子供か若造か位の差でしかない。

「確かにハッキリさせた方がいいわね、お母様に対応を尋ねるので
付いてきなさい」

ティーナはそう言って踵を返すと、ズンズンとマレーナのもとに
向かいだした。

慌てて付いて行きマレーナの所にたどり着くと、私の年齢に対する
意見を求めた。

マレーナがいい機会だからと何歳が良いのか、自分自身は何歳だと思っているのか、身体的特徴を考えると何歳なのか等を尋ねてきた。

「詳しい説明は省きますが、私の人種は総じて身体が小さいのです。ですからこの位の身体の高さでも、恐らく15〜16かなあと思っ
てます。何歳が良いかというのは20歳以上、何歳だと思うかとい
うのは正直分かりません」

「ん〜……それでしたらティーナと同じ18歳にしましょう」

「ええ！」

夕飯のおかずを決めるが如く、少し悩んだ後に簡単に18歳に決定してしまった。

ティーナはどういう意味での驚きなのかは分からないが、納得して
いない事だけは見て取れた。

正直私としても若返って嬉しいというのと、社会人として積み上げ
てきたものが消え去った、という一抹の寂しさを同時に感じ、一
言で表すなら『微妙』だった。

「どの年齢ならどう不都合かがさっぱり分かりませんので、それで
構いません」

子ども扱いは嫌だし、かと言ってこの身体で30代は有り得ない
だろうという思いもあったので、特に反対する事も無く了承した。

「それならば何時婚約や婚姻を内外に示しても、年齢的な問題はあ
りませんわね」

「……それはまあ」

結婚の話になるとどうにも表情が暗くなってしまう。

この世界に来て2週間、昔の自分と決別しろと言う方が無理がある。

過日、たまたま一人になり砂に文字を書きながら空腹を感じた時、ゴハンと味噌汁と煮物を思い浮かべた事があった。

そうやって以前の生活を思い起こすと、必ず最後には家族や友人や優子の顔が浮かび精神的に不安定になっていた。

今こうして自分に出来る事を探しているのも、マレーナに『顕現者』という名前を利用するという利害が絡む思惑があるにせよ、扶養されているのが申し訳ないというのと、何かしていないと精神的に破綻してしまいそうだったからだ。

私の表情が暗くなったのを見て取ったのだろう、マレーナが申し訳なさそうに言葉を発した。

「圭介様……王家として心苦しく、そしてとても話難い事なのです
が……圭介様には公人として過ごして頂くしか道はないのです」

「……………」

「王家としての力が及ばなかったのが原因だというのも重々承知しております。その事を恨ましく感じるのであれば、わたくしを恨んでくださって結構です」

「……いえ、恨んだりなんかはしませんが……」

感謝こそすれ恨むなどという事はありはしない

「そう言って頂けると助かります。圭介様……わたくし自身としても本意ではないのです。しかし、戦場において闇夜を照らす光や、害意を遮断する見えない壁等の奇跡が起こり、その奇跡の最後に圭介様が現れ、人々から『顕現者』として祀り上げられた今となっては、たとえ私達王家が自由を約束したとしても、それぞれの思惑を抱える貴族や他国の人間などが放置するはずありません。私やテイーナは圭介様のお話を伺い、あの奇跡が圭介様が起こしたものである事は知っています。ですがあの戦場に居た兵士やそれを伝え聞いた市井の者達は『顕現者様が奇跡を起こした』という風に伝わ

っているのです」

あずかり知らぬ所で自分が偶像化されているというのも妙な気分だった。

それは兎も角、自分でも有る程度予想はしていたがマレーナが私を保護した理由は、求心力を得る為に『顕現者』の身柄の確保という意味と、本来の意味での私の身柄の保護だった。

私は何も知らなかったのだから『帰る方法があるので指示に従え』等と甘い言葉を投げ掛ける事も出来たのだ。

それをせずに誠実に私に向き合い、衣食住の他に身の安全の確保すら世話になっていた。

『頑張れば帰れるはずだ』なんて楽観的ななどなれやしない。かといって『王になってハーレム作ってやる』等と簡単に気持ちを切り替えられる程強いわけじゃない。

しかし、もうコレばかりはどうしようもなく手も足も出ない、何度でも自分に言い聞かせよう『二度と日本に帰る事は出来ない』と。だから仮初の王になる事に本腰を入れよう。

そして出来るだけ早く権限を手に入れて、ティーナの本心を聞き出そう『誰か好きな人はないのか』と。

もし愛する人が居るならば祝福し、愛し合う2人を国中に売り込もう。

営業マンの口先と、王としての権力があれば買ってくれるはずだ。

そして優子以外を愛する事が出来なかったら、農村にでも隠居して味噌でも作ろう、日本食を開発したら売れるかもしれない。

もし誰かを愛する事が出来たのならば、それはその時考えよう。

だから、今はまだ完全には無理かも知れないが、後ろ向きに過ごすのはもうやめよう。

「いえ……今改めて感謝しております。そしてマグダレーナ王妃様、クリスティーナ王女様。これからも宜しくお願いします」

閑話：新たな主（カティ視点）

顕現者様が私の前に現れたのは、王妃様が何処かへ慌てて出立して行った次の夜明け前の事でした。

部屋に運び込まれた顕現者様は、黒い髪が特徴的な男の子でした。見た事もない荷物も運び込まれ、お召し物も珍しい生地でしたが、どうして大きさの合わないものを身につけていらっしまったのでしょうか、背伸びでもしたかったのかなと少し失礼な事を思ってしまった。

「顕現者様が目を覚ましたら、わたくしに報告してちょうだい」
「はい王妃様」

どうやら暑くて寝苦しいのか、寝汗をかいてらっしまったので拭っていると、何かを呟きながら起きたようでした。

「お気づきになれましたか？」
「え？ あ、ああ……はい」

初めての会話は要領を得ず、キョトンとした顔は笑ってしまいそうでした。

そんな失礼な印象ばかりを持ったのですが、どうやら顕現者様は王妃様のお婿様、つまりは王様になられるそうで、より一層お仕える際に粗相の無い様にと気を締めました。

しかし、王妃様との話が終わった後の顕現者様はどこか儂く、余りにも弱弱しい印象を与えていました。

求められる物も尋ねられた物も良くわからず、期待に添えなかったと悔しい思いをしたのですが、突然お倒れになられ、駆け寄ってお体の具合を尋ねようとしたところ、涙を流しているのを見つけてし

まいりました。

私は男の人が泣くところを始めて目にしとても驚いたのですが、隣に居た私にもその悲しみが伝わって来そうな程悲しそうに涙を流すその姿を見て、王妃様とどんな話をしたのか、その話が原因だったのか、はたまた別の何かなのか、顕現者様が何によってこれ程悲しみを感じてらっしゃるのかが気になりました。

それと同時に、私はメイドとして何かをしなければならないという思いに駆られ、後から考えると大変失礼だったのかもしれませんが、私が泣いた時にお母様にしてもらって嬉しかった事、つまり頭を抱えて胸に顔を埋めさせていました。

「……なんというか……申し訳ないというか……ありがとうというか」

「いえ、お気になさらないで下さい」

暫く時が経つとそんな言葉を掛けて下さりながら立ち上がり、その顔には未だ若干の陰りは見受けられるものの、幾分か元気を取り戻して頂けたようでした。

それからというものの、私の勝手な思い込みかも知れませんが、心から私を必要としてくださり、メイド冥利に尽きると他のメイドにも少し自慢をしてしまったりしましたが、流石にコレはナイショです。お茶を用意したり、歴史の話を所望されたりしながら日々を送り、意気揚々と顕現者様の下へ向かったある日、王妃様に呼び止められました。

「おはよう御座います王妃様」

「おはようカティ、それで最近の顕現者様のご様子はどうか？」

王妃様と言葉を交わすというのは、メイドの中では憧れであったり、ある種自分の能力が認められたという事を示すものだったりと

いう見方があります。

「は、はい……最近ほ微笑みを浮かべたり声を出して笑われたりなさる事が増えたように思います」

「そう！ それは良かったわ」

そういう事なので、顕現者様の専任を仰せつかった時にその機会が度々訪れるかもと期待しては居ましたが、いざその場面に立ってみると緊張してしまいました。

そして私の返答に喜んでくださったのですが、少し気にかかる事があったのです。

「ただ……」

「ただ？」

「はい……なんと申しますか、一人になるのを怖がっていると言いましようか……笑顔の中にも少々陰りがあるように見受けられるのですが……私の家の近所に寂しがり屋のアンナという年下の女の子が居たのですが、丁度その子と雰囲気似てる感じがしました。男性なのにおかしな事ではございますが……そう、寂しがっているというのがピッタリの印象を受けるので御座います」

「そう……」

「どういう事なのか私には分かりかねますが、顕現者様がお持ちになつていた道具の事等を御説明なさる時にそう言つた印象を強く感じました」

「……貴女に任せて正解だったわね。これからはティーナにも時間を作らせて顕現者様とお話をするよう伝えておくわね、貴女にも負担が掛かるでしょうけどこれからもお願いね」

「は、はい！ 誠心誠意努めさせていただきます！」

大変嬉しいお言葉を賜り、恐悦しながら舞い上がってしまいました

た。

「ふふふ、本当にありがとうカティ」

「い、いえ！ 私なんかで本当に良かったのかと思っておりますのに、勿体無いお言葉に御座います！ お氣に為さらないで下さい」

舞い上がった次の瞬間には恐縮しすぎて固まってしまいました。

そんな慌しい朝の遣り取りを終え、右手と右足が同時に前に出てしまふほど緊張で身体に変調をきたしていたのですが、顕現者様のお部屋に入室すると、それ以上の衝撃が私を襲いました。

「おはよう御座います、カティさん。唐突では御座いますが私の先生になってください」

「ふえっ！？ 私がですか？ 一体どういった……？」

目を白黒させてその内容を尋ねましたが

「はい、話は出来るようなのですが、その辺の書物に目を通したら文字が読めない事が判明しました」

「はぁ……左様ですか……」

事と責任の重大さに押し潰されそうでお腹が痛い、本当に私なんかで宜しかったのでしょうか、王妃様。

なし崩しの強制的というか、恐れ多くも現顕現者様で未来の王様の先生になってしまった私。

何をし始めるのかと思ったら、文字の練習を砂で行なうという、市井に暮らしていた私なんかよりも財布に優しい未来の王様。

色んな物に興味を示され、色んな事を質問投げ掛け、その見識や考え方に畏敬を感じさせる王様。

ある時は日時計を作り始め、不思議に思いながらも微笑ましく眺め、

星見の杖に案内すると日も高い昼間なのに、関心しきりに覗き込み『ゴメン、日を見すぎて何も見えないから少し待ってくれ』等と可愛らしい部分もある王様。

それでも常にお顔には陰りが見えて、その陰りを何とか取り除いて差し上げたいと考えていたのに、ある時お話になられたその内容に、あの時流した涙と泣き顔に納得しながらも驚きを隠せませんでした。日々のちよっとした事や色んな事に対する考え方を見て、大人であると感じてはいましたが事実大人だったのです。

確かにあの涙は子供が流すような涙ではありませんでした。別れには色んな原因があります。

単に振られた場合、親の転居等で離れ離れになる場合、親の取り決めで婚姻する相手を決定してしまった場合、戦死、事故死、病死等の死別、そして顕現者様の様に奇跡と言われる力によって二度と会うこと適わぬだろうという場所にまで引き離されての別れ、これらの別れの中で一体どれが一番悲しいのでしょうか。

「カティで不明な事があれば私が教えて差し上げるわよ」

そう言って部屋に訪れてくださるようになった王女様。

王女様が来て下さった事で、顕現者様もより一層元気になられたようでした。

しかし、貴族ではない私にはもう一つ気になる事があります。

あんな涙を流す程、心の中はその方で満たされているのでは無かろうかと思われるほど、彼の地の女性を慕っている顕現者様と王妃様の命令で婚姻する王女様。

顕現者様のお気持ちを存じ上げているご様子、そんな状況の中で王女様はどんなお気持ちなのでしょう。

私は顕現者様の様に強い愛情を感じた事はありませんし、王女様の様に貴族でもないので、婚姻に関して親が全てを決めるような立場の家族でも有りません。

お二方のお気持ちを正確に察して差し上げられない事が心苦しいのです。

閑話：王家にとって（マレーナ視点）

その日わたくしは何時もの様に政務をこなしていました。

王位継承権を持っていたはずの人物は既に国外に亡命し、早急にテイーナに婿を迎え入れようと考えたがその時には王位を継ごう等と考える者は皆無。

王家を見限ったものは離反し、反意を抱えるものは陰口と雑言を並べ立て何一つ解決策を打ち出さない、友好的だった者も王家に属してこの切迫した事態を解決させられる様な者も居らず、時折届くのは無責任な提案ばかり。

「王妃様、ビューロー伯爵が面会をお求めですが……」

「また提案ですわね……しかも樂觀的過ぎる……クリフ爺、ビューロー伯爵には『政務多忙につき面会はお受け出来かねます』と伝えておいて」

「畏まりました」

その日も相変わらず無責任な提案が舞い込んでいた。

王の病死により王家存続が危ぶまれ、万策尽きて支配権の譲渡すら念頭に決意を固めたのに、周囲の貴族諸侯がわたくしを為政者に祭り上げた。

切迫した王国の現状を、高々1ヶ月程度で改善する事など出来るはずも無く、しかし王国の現状に変化が現れぬと見るや『女が政治に出てきてもやはり』等と陰口を叩く始末。

そんな事に嘆いて居ると、前線からの伝令が届いたとの知らせが入った。

「直ぐにこちらに通してください！」

「畏まりました」

ローゼンバーグ出兵の報が届いてからそれなりの時間が経過している。

その様な時期に届く知らせとなれば、増援要請かはたまた敗北か。

「お伝え致します！ 我々王国軍、国境付近にて敵ローゼンバーグ皇国軍と対峙、交戦状態に入り戦闘を継続するも、突如空より光の玉が顕現、同時に双方の兵士が自国領に弾き飛ばされました」

大凡想像していた報告に身を硬くしていたが肩透かしを喰らい、埒外の事態に伝令の報告の意味が理解できませんでした。

「双方戦闘を再開しようとするも、国境に害意を遮断する見えない壁が出現し、いずこかより『矛を収めよ』という声が響き渡り、双方越境も敵に対する攻撃も不可能となり戦闘が終了しました。現在駐留する調査隊の選別作業中に御座いますれば、王妃様におかれましても、不可解な奇跡の現象を正確に判断し、今後の軍の方針を決定して頂きたく、現地での検分を所望するとの事に御座います！」

前線での奇跡は神の啓示か悪魔の囁きか、しかしいずれにしても途中で戦闘終了を余儀なくされ、兵士達の犠牲を積み重ねる事が無くなったのは僥倖でしょう。

「クリフ爺、近衛騎士団長に出立の指示を伝えてください。それとわたくしの荷物と馬車を！」

「畏まりました」

「それと……遠方よりの早馬ご苦労様でした。兵舎に戻り身体を休ませてください」

「ハッ！ 勿体無きお言葉に御座います！」

今回の前線だったバーゼルトという街に程近い国境、その前線を目指しながら馬車を走らせていると、前方より早馬が向かってきた。

「火急の報により馬上からの報告ご容赦願います！」

「構いません」

「ハッ！ ローゼンバーグ皇国軍、見えない壁に攻撃を加えるも壁は未だ健在、1刻程前ローゼンバーグ皇国軍に正式に撤退命令が出された模様です。ローゼンバーグ皇国軍、軍の再編を行い全軍が撤退しました」

「そう……では、將軍方にわたくし達が向かっている事を伝えてください」

「ハッ！ 了解いたしました！」

わたくしが現地に到着すると確かに空に光の玉が存在し、見えない壁と言われる物の現状を確認する為なのか、数人の兵士達が剣を振っていたり、肩を前に突き出して体当たりする様子が見て取れました。

馬車の中からは何かあるようには見えないのですが、剣は虚空で弾かれ、突進した兵士も虚空でのけぞって倒れこんでいました。

周囲の安全が確認されると近衛騎士団長のクラウスが訪れ、手を引かれて馬車から降りると光の玉が私に接近してきた。

周りは警戒していましたが、わたくしは不思議と恐怖を感じず光の収束を眺めていると、光の中から男の子が現れました。

不思議な道具と持ち不思議な衣服を身に纏い、黒髪が特徴的な男の子。

周囲に居た兵士の誰かが『顕現者様だ』と声を上げ、その声は瞬く間に広がっていった。

後からも考えを巡らせては居ましたが『この方を王にしよう』と考えたのは、兵士達の興奮した姿を見たその瞬間だったかも知れませ

ん。

「顕現者様が目を覚ましたら、わたくしに報告してちょうだい」

「はい王妃様」

顕現者様のお世話をメイドのカティに任せ、執務室に戻ると頭を悩ませました。

求心力は既に持っている、ならばどうやって王になって頂くか。

また、あのような奇跡を起こしてまさかとは思いますが、悪逆な者、無能な者だった場合どうするべきか。

「王妃様、顕現者様がお目覚めになりました」

「そう……今行きますわね」

果たしてこういった人物だろうか、ただの凡夫か悪逆な覇者か、それともわたくしを、この国を救って下さるまさしく顕現者様なのか。

「お加減は如何ですか？」

「んあ？ ……あ、ああ、問題ないです」

居心地が悪そうに辺りに目を配り、現状説明の最中は子供とは思えぬほど真剣な目を向けていました。

少なくともただの凡夫ではなさそうですが、人となりを見るには今しばらく時間が掛かる。

幾日か経過後、特に不穏な動きも無かった為、娘のティーナと顔を合わせる機会を設けました。

たとえばどんな人物だったにせよ、準備だけは整えて置くべきだと考えたのです。

「ご招待有難う御座いますマレーナ王妃様。それと始めまして、私は田中圭介です」

「お待たせしてしまっただようで……招待をお受け頂き嬉しく思いますわ。この子はわたくしの娘のクリスティーナです」

「初めまして、ハルトヴィック王国の王女、クリスティーナ・フォン・ハルトヴィックです」

挨拶を終え会食を開始すると、何と顕現者様がステーキにドレッシングをかけてしまわれた。

思わず漏れ出た声に気がつき顔を向けて来られたのですが、何と御説明してよいのか分からず戸惑っていると。

「!? ……………お、美味しいですね」

「「プッ!」」

口をすばませ眉間にシワを寄せた表情で言われても、説得力がありませんわ。

私の悩みはなんだったのか、ティーナに対しても気遣いを見せるこの方が悪逆なはずが無い。

「率直に申し上げます。圭介様には『顕現者』という肩書きを持つままハルトヴィックの王族になって頂く為に、婚約後出来るだけ早期に婚姻して頂きたいです」

あの兵士達の興奮、この方の人となりを考えればこの方に王になって頂く以外に王家に道は残されていない。

わたくしが関与せずとも、いずれは政争に巻き込まれて最悪の場合心優しきこの方の命でさえも危ぶまれる。

それならば理解を求めて協力して頂こう。

そのわたくしの決心は揺らぐものではありませんでした。

その後に顕現者様から語られた内容には確かに驚かされましたが、帰ることが出来る可能性は低いとなればわたくし達のする事は決まりきっています。

確かに悲しく辛い事ではありましょう、神を呪うとはまさにこういった事なのでしょう。

しかしそれならば、その心の中にティーナやわたくし達を住まわせれば良いのです。

例え時間が掛かったとしても。

この王国にて幸せになって頂ければよいのです。

わたくし自身も顕現者様の幸せを手に入れるべく決意を新たにし、ふと気がついて周りを見てみると、貴族達の顔が血色ばんでいるようでした。

伝え聞いたところによると、顕現者様が王国に居る事で皆が希望を持ったらしいのです。

楽観主義と言おうか、それでも顕現者様の確かな求心力を実感し、心持肩の荷が下りた気がしたのですが、ふと前方をみるとカティが歩いているのを見つけました。

「おはよう御座います王妃様」

「おはようカティ、それで最近の顕現者様のご様子はどう？」

今現在顕現者様は何を求めているのか

「は、はい……最近は微笑みを浮かべたり声を出して笑われたりなさる事が増えたように思います」

「そう！ それは良かったわ」

やはり心優しきカティに任せてよかった。

「ただ……」

「ただ？」

「はい……なんと云いますか、一人になるのを怖がっていると言いましようか……笑顔の中にも少々陰りがあるように見受けられるのですが……私の家の近所に寂しがり屋のアンナという年下の女の子が居たのですが、丁度その子と雰囲気似てる感じがしました。男性なのにおかしな事ではございますが……そう、寂しがっているというのがピッタリの印象を受けるので御座います」

「そう……」

「どういう事なのか私には分かりかねますが、顕現者様がお持ちになつていた道具の事等を御説明なさる時にそう云つた印象を強く感じました」

「……貴女に任せて正解だったわね。これからはティーナにも時間を作らせて顕現者様とお話をするよう伝えておくわね、貴女にも負担が掛かるでしょうけどこれからお願いね」

「は、はい！ 誠心誠意努めさせて頂きます！」

緊張でカチコチになっているカティ。

でも、感謝したいのはこちらなのですよ。

今あの方に必要なのは、貴女のような心の機微を感じ取れる人物なのです。

そしてその心の痛みを和らげる包容力を持った者のみなのです。

「ふふふ、本当にありがとうカティ」

「い、いえ！ 私なんかで本当に良かったのかと思っておりますのに、勿体無いお言葉に御座います！ お氣に為さらないで下さい」

その後2度目の会食がなされるも、やはりお顔の陰りは消えなかった。

しかし、現状を正確に御説明差し上げたところ、顕現者様の目が変

わった。

「いえ……今改めて感謝しております。そしてマグダレーナ王妃様、クリスティーナ王女様。これからも宜しくお願いします」

それは何かを貫かんとする目でした。

閑話：私の婚約者（ティーナ視点）

今日もまたお母様からお声が掛かった。

今度はどこの貴族と会うのか、最近良く見かける慌しいお母様の姿だった。

お兄様が前線で戦死してしまわれ、お父様が病に倒れ私達家族は2人きりになってしまった。

以前地方の貴族を見た事があったけど、これが没落ということなのか。

「ティーナ、今日も貴女には会食を一緒にしてもらいます。貴女のみで王家にとってどういう人物になり得るか判断しなさい」

「はいお母様」

『王家にとって』これも最近ではお母様の口癖になってしまわれた。

無理も無い、こんな状況になって貴族達は保身に走り、私達自身を見る者など誰も居ない。

お母様に頼ったのは他ならぬ貴族達なのに、皆こぞって陰口を叩き無責任な言葉を並べ立てる。

例え王女であってもそんな王国の貴族達の声は私の耳にだって届く。周りの人間は皆敵だ。

ここ半年で私が理解した事実。

今日はどんな美辞麗句を言の葉に乗せるのか、どんな下心があって私達に近づくのか。

私が、婚姻を結ぶという事に夢を抱いていたのは何歳までだったか、正式に婚約の話が進められ私達当人同士も何度も食事等を繰り返すのに、唐突に話が消えた事もあった。

それとも王家に生まれた者は、生まれたその瞬間からそんな夢想を

抱いてはいけないのでしょうか。

「ご招待有難う御座いますマレーナ王妃様。それと始めまして、私は田中圭介です」

「お待たせしてしまったようで……招待をお受け頂き嬉しく思いますわ。この子はわたくしの娘のクリスティーナです」

「初めまして、ハルトヴィック王国の王女、クリスティーナ・フォン・ハルトヴィックです」

タナカケイスケ、王城に招いているのだからそんなわけは無いのだけど、姓も無い者なのかと驚いた。

それにしても妙だ。

婚約の為の顔合わせであるはずなのに、この者の親等の親類縁者の貴族がいないではないか。

都合が悪かったのかとも考えたが、王国の貴族達の考える事など皆同じだ、顔合わせなどそこそこの政治の話をしだすのだ。

それなのに、政治の話をすべき人物がいない。

「これはハルトヴィック名産のドロテアのステーキなんですよ、召し上がってみてください」

それにしてもお母様は何時に無く気に掛けているご様子、タナカケイスケという名前など初耳だ、一体誰なのだろう。

少し気になり顔を上げてみると、ドロテアのステーキにドレッシングをかけた。

「「あっ!?!」」

何をしだすのだこの子は、何故不思議そうにこちらを見ているんです。

そのまま食べる気じゃないでしょうね、まさか食べ方を知らなかったのか。

その可能性に思い至ると無礼だったが笑いがこみ上げてきた。なぜ教えて上げなかったのか、なんとお母様も笑いを噛み殺していらっしやる。

「!? ……………お、美味しいですね」

「「プッ!」」

なんだろう今日の会食は、お母様がこの子を晒し物にでもしたかったのだろうか。

「あ、新しいのを持ってこさせますね、…………ふふふ」

「ああーっと、いえこのままで構いません。私の所では『食べ物粗末にするな。出されたものは綺麗に食せ』という格言がありますので」

そう言ったあとこちらをチラチラ見てくる。

正直視線を感じると先程の顔を思い出してしまう、塩と砂糖を間違えたクアラ茶を飲んだような顔。

今日の会食は何時もと違うのだろうか、そんな疑問が大きくなった頃お母様が姿勢を正した。

「それで……状況は理解していただけでしょうか？」

「はい、カティに教えてもらったので状況は掴めました。その上で質問なのですが……今後私の扱いはどうなるのでしょうか？」

どういう事だろうか、話がちっとも見えない。

「率直に申し上げます。圭介様には『顕現者』という肩書きを持っ

たままハルトヴィックの王族になって頂く為に、婚約後出来るだけ早期に婚姻して頂きたいです」

顕現者、最近王城内でよく耳にする言葉、この子がそうだったのか。

「えーっと、ハルトヴィック王や周りの方々の反対とか出なかったのでしょうか？」

「王は半年前に倒れ、先月他界し現在は鬼籍に入っております、王も4年前の戦争で命を落としていますので、ハルトヴィック家として残っているのは、わたくし達だけなのです」

そうだハルトヴィック家は私達だけ、周りは皆敵だ。

「それは……ご冥福をお祈りいたします」

「有難う御座います」

「心にも無い事を……」

「ティーナ！」

何か言っているみたいだったが、私の耳にはあまり入らなかった。

「王族になるというのが実を伴うものか形だけなのかは兎も角、婚約するに当たってどう呼びすればよいのでしょうか？ マレーナ王妃様のままでよいのでしょうか？ それともマレーナ王女様になるのでしょうか？」

「「……は？」」

「あれ？」

またこの子はおかしな事を言い出した。

王妃が王女、なんだそれは。

この子の相手はお母様だったのかなんて考えたけど、この子がお父

様。

有り得ない。

なにをどう勘違いしたのか、兎も角もお母様より正確な説明がはじまった。

自分の年を質問し、お母様も私も大差のない返答し、メイドから鑑を受け取ると驚いていた。

そしてその後に語られる宣言に思考が追いつかなかった。

王になるという、それも権力欲に溺れた言葉ではなく、私達に心からの庇護を求める条件として。

これは今までと違うのだと感じ始めたとき、私はお母様以外の心許せる者が現れたのかも知れないと考えた。

この子も家族を失ったのだ。

正確にはこの子は全てを失ったらしい、大凡半分の年齢と、親類縁者と故郷と職と、そして恋人を。

私達親子以上に何もかもを奪われた男の子。

会食の前と後では、私はこの子、いえこの男性に対する印象を変えていた。

その後数日経ったある日、お母様に呼ばれ

「ティーナ、しばらく顕現者様と同じ時間を過ごして……貴女は嫌かも知れないけど、暫く同じ時間を過ごした後にどうしても受け入れられないのであれば、その時は……その時はわたくしがなんとかします」

そんな言葉から始まったケイスケとの時間は、思いもかけず楽しいものだった。

今までの王国の貴族にはいなかった、正確に緻密に王国の現状を知ろうとする姿勢。

その知識や考え方を悔しく感じたりもするけど、31歳だと言っていたのに、文字の練習の途中まるで子供の様に砂遊びをしていたり、

そうかと思うととても不思議で楽しい知識を披露してくれた。

「ここに両端が輪っかになった麻紐と、お湯の入ったティーポット、そしておやつのお菓子を刺さっていた三本の木の串があります。この麻紐をティーポットに縛りつけ……つと、麻紐がつながれたティーポットを三本の串を使ってこのテーブルにぶら下げる事はできますか？」

ニコニコしながら質問してきたので『面白い挑戦ね』とばかりにカティと共に何度も試したけど上手く行かず、結局出来るはずが無いという結論に至った。

「ではまず、串を1本輪に通し、その串と糸をテーブルの上で指で押さえておきます。このまま指を離したらティーポットはおちますね？」

「はい」

「当然じゃない、それにさっきカティが試してたわよ」

いまだニコニコ顔を崩さない、いったいその状態からどうするのだろうか。

「では次の1本は、ティーポットで引っ張られて円じゃなくなってしまった麻紐の輪の部分を、この串で広げます。麻紐の輪が三角形二つがくっついた形になりましたね？」

「そうですね」

「ええ」

だからなんだというのだろう。

「最後の一本は、指で押さえている串この串の机から飛び出してい

るほうの先端と、輪っかを広げている串の中央を結ぶように……
ほらさげられた」

「「わああああああ」」

驚きの結果に2人で詰め寄りたところ『昔理科の実験の時に教わった』と言っていたけど、どれほど高度な教育を受けていたのか、さっそくお母様に教えて差し上げようと材料を持って部屋を飛び出し、お母様に教えて差し上げるとお母様も驚いてはしゃいでいた。そう、はしゃいでいた。

ケイスケと食事を共にしてから良く見かける昔のお母様だった。幾日か経過したある日、ケイスケの年齢の話になった。

「確かにハッキリさせた方がいいわね、お母様に対応を尋ねるので付いてきなさい」

連れ立ってお母様に意見を求めたが、私自身もケイスケの危うい立場というのを再認識させられた。

理不尽な現状でも目を伏せることなく、最後には思いがけない言葉を発した。

「いえ……今改めて感謝しております。そしてマグダレーナ王妃様、クリスティーナ王女様。これからも宜しくお願いします」

何かが変わらと思った。

第6話：担当エリア視察

確固たる決意をした私は、王様業に本腰を入れることにした。

元営業マンらしく担当地区の正確な現状確認をするべく、マレーナに断りを入れクリフに来てもらい、ティーナやカティが『何事が始まるのか』と見守る中、国内整備の資料作りに取り掛かった。

「まず食べ物なんですが……城内で食べてた物、今朝のパンに使ってる麦とか野菜は育てて収穫しているってことでいいですか？」

「左様で御座います。実際には戦争の為働き手が減少したり、畑が痩せて収穫される量が減ってきていますので、ベルガー公国等から買い足しておりますが」

働き手が足りないのは屯田制でも導入しようか、しかし兵力としての質の低下も懸念されるので保留。

畑が痩せた件は見てみないとなんとも言えない。

現在では、作物の発育不順で低下してしまった収入を確保する為に、二毛作をしている所もあるらしい。

「農耕用の牛だか馬だかの餌はどうしてるんでしょう？」

「農耕には馬を使っております。そして恐らくはですが、周辺の雑草でも餌にしているのでしょう。それも出来なくなってくれば馬を売り払い、耕すときは自分でやるか他の農家から馬を借りてくるという話も聞いた事が御座います」

恐らくは三圃式や輪栽式、肥料の開発等新農法が必要になってくる。

学校の授業と農家である新潟の親戚の手伝い、営業先の農機具メーカーの話等、中途半端な知識だけで技術がない。

この辺は知ってる知識を纏めて草案にして試験するしかない。

次は工業だが、工業に付いては一部若手の就労者が前線に借り出された場所もあるが、それよりも軍需製品の製造の為に、産業自体は活性化していると言っても良いらしい。

「商売とかはどうなんでしょう？」

「物価が不安定ですので、余り繁盛はしていないようで御座いますねえ」

物価の上昇や不安定だったりする為に客足が途絶え、経済自体が衰退しているようだった。

国家組織としては王家が全てを統括している。

王城には執政機関があり定期的に年に1回、臨時的に年に2回程、地方を代理統治している貴族も含めての報告会が開かれる。

その際に代理統治に関して指示を与えるらしい。

軍組織は王国軍団が第1から第10まであり、一つの軍団が凡そ2000人程度で構成される。

凡そ1000人を統括する百人長が20人程おり、その上には1000人を統括する千人長が2人、その2人に指示をだすのが軍団長であり、通称では將軍と呼ばれる。

この千人長と將軍は現在では貴族が務めており、その將軍の中から王が選拔し委任した大將軍が居る。

「どういう兵隊がいるんです？」

「種類は重装騎兵、軽装騎兵、弓騎兵、重装歩兵、歩兵、弓兵、法兵といった具合で御座います」

法兵というのが馴染みがないが、魔法を使い味方を支援したり、敵に対しての魔法攻撃をする兵だそうだ。

軍については門外漢な為、かじり程度に知っている知識を提案とい

う形で示してみるのが良いだろう。

とりあえず思い浮かぶ疑問を全て聞き終え執事長のクリフに礼を述べた。

現状と問題点をノートにまとめ、腕を組んでいるとティーナとカティが不安げにこちらを見ていた。

「どうしたの2人とも？」

「いえ……」

「なにか解決策はあるの？」

「上手く行くかどうか分からないし、問題点も実際見てみないとはっきりと判断出来ないからなんとも言えないけど、いくつか考えている事はあるよ」

カティとティーナ、特にティーナは自分達の国を何とかしたくても何も出来なかったのに、この世界に訪れてから1ヶ月も経っていない私が、不確定ながら対応策を打ち出した事に驚いているようだった。

「ちょっと話を聞いた私も当然2人も、この国の問題点というのは分かると思う。人手不足と農作物の収穫量の低下、街での売り買いが少ないのと国が財政難って事だよね？」

「そうね」

「まず人手不足については、あらゆる作業の効率化を図るのと、別分野からの救援を送るって方法があるね。兵士達に日ごろは農作業に従事させるって方法もあるし、それが難しいなら農業での繁忙期のみ手伝いに向かわせるって事も出来るよね」

兵士が農作業をするという事について難色というか、可能なのかという疑問を浮かべていたようだったが、農作業は体力強化に繋がる面もある事を説明すると、その表情からはある種の希望を見出し

ているのが伺えた。

「収穫量の低下については、実際に見て聞いてその上で試験するしかないね。新しい方法が無いわけじゃないけど、その方法が使えるかどうか試さない」と

全てを説明するのは時間が掛かるので保留し、次の件について話題を切り替えた。

「街の売り買いについては、適正価格での安定供給という一言に尽きるんだ。売り買いの事はいろんなことが絡んでくるけど、簡単に言えば街の皆がちゃんと給金をもらって、店に並ぶべき食べ物や日用品が沢山出回ればドンドン発展していくんだよ。財政難の方は収入を増やせばいい、税金で増やすのは街の人の生活が成り立たなくなる。お金を発行するには金が大量に必要だし、銅貨でそれをやったらお金の価値がもつとさがってしまう。なので他国に物を売るしかない、売れるものを幾つか考えているけどこれも要試験っていったところだね」

知識という名の情報があるだけで、コレだけ選べる選択肢がある。農業についてもっとしつかりとした情報があれば試験せずに導入出来るだろうし、他国の情報があれば需要がありそうな商品を絞り込める。

営業でも国家運営でも情報が大事だという良い例だ。

その日は資料のまとめに終始し、翌日より行動を開始した。

「出てきて大丈夫だったの？ 王女様なんだよね……？」

「なに言ってるのよ……ケイスケだってある意味王子じゃない。それにお母様には断ってきたし、そもそもお母様自身が『是非とも同行させてもらいなさい』っておっしゃったのよ」

「ああ、まあ……そっか、王子になるのか」

王子などとまったく実感が無いので困惑しきりだった。しかしマレーナがティーナに同行を推奨するというのは、国家運営の勉強をさせたいということもあるのだろうか。

街に繰り出すと風景も珍しかったが、街行く獣人の方々が目を引いた。

「獣人だねえ……」

「珍しいの？」

散々話で情報は得てきたのだが、やはり視覚情報というのは大きいらしい。

異世界である事を実感しつつゲンナリした眩きが漏れると、ティーナが心底不思議そうに尋ねてきた。

「まあ……」

力なく答え意識して市井の有様を記憶していくのだが、正直獣人の方々が怖い。

アニメや漫画で見る分には格好良かったり可愛かったりするのだが、リアルで顔がライオンだったりするのだ。

自分は本当にやっていけるのだろうか等と考えながら、顔は人間でウサギの耳だけ生やした女性に癒された。

最初は飲み屋さんの従業員かと思ったが獣人らしかった。

「ちょっと止まって下さい」

馬車は暫く走り続け、王都から少し外れた農村へと差し掛かったところで馬車を止めてもらった。

カティの話では草花が芽吹く頃が1月で、現在は2月だそうで地球でいうところの5月だろう。

春蒔きの麦だろうか、大麦か小麦かは知らないが稲のような尖った芽が見えている。

馬車を降り畑の土を手でかき混ぜてみたが、褐色で水気が無く砂のようだった。

ミミズなんかは早々頻繁に見つかるものでもないが、それにしても土中の虫が殆ど居ない。

遠くを見ると馬が放牧されており、堆肥を保存するような小屋も見当たらない。

恐らくは糞がそのまま肥料になっているのかもしれない。

とりあえずその日は近隣の農村を見て回り、畑、空き地、湖、池、川や林等、大凡一般的なものを観察し、農作業をしていた農夫に話を聞いたりした後王城に帰還した。

「いやあ……予想以上に疲れた」

「お疲れ様でした、顕現者様」

「ああゝそろそろそれやめようよ、お願いだから」

「ですが……」

やはり立場の違いと言うのは大きいようで、中々納得してくれなかった。

「どうしても差をつけなきゃならないという事なら圭介様とか、この際そういうのでもいいからさ」

「畏まりました。では……ケイスケ様とお呼びさせて頂きますね」

最終的には困ったように苦笑いしながら了承してくれた。

さてそれは兎も角、私は国家再建案を纏めなくてはいけない、欧州に似ているのだから昔学校で習った輪裁式等を導入すればいいのか

も知れないが、どうしたって休閑地を作らなきゃいけない。

日本式を導入するにしても肥料の問題がある。

どちらにしても、試験と観察と導入というプロセスが必要な為時間が掛かってしまう。

その辺は仕方ない部分もあるのだが、問題は切迫した今の状況をどうするべきかという事。

「？ どうなされたんですか？ あ、あの……？」

「……………あ、いや、なんでもないよ」

カティの姿を眺めながら考え込んでしまった為、カティを困らせてしまった。

国内の農法を一新しようと思ったら、公的基金による支援が必要だ。その金を捻出する為には収入を増やさなくてはならない、税率を上げるか税金を払う人間を増やすか、他国との貿易による収入か。

前者二つが無理なら他国に対して何を売るか。

元営業マンなので物を売ることに關しては多少の自信はあるが、まさか自分で売るものを探す事になるとは思わなかった。

ある程度構想はあるが、一つの事に国の命運全てをかけるわけには行かないので、農法も含め並行的に作業を進めなくてはいけない、それらの初期費用をどうするかはマレーナに聞いて見るしかない。

「今マレーナ王妃はどこにいるだろうか？」

「王妃様ですか？ この時間ですとまだ執務室にいらっしやると思いますか」

カティに先導され執務室を訪れると、マレーナが書類と格闘していた。

「あら？ 圭介様いかがなされたのです？」

「実は私自身でも国内を見て周り、拙いながらも国家再建案を纏めてみたんですよ」

「まあ！？ それは本当ですよ！？」

「……え、ええ」

マレーナの驚き様は尋常じゃなかった。

少し腰の引けた私だったが、椅子を進められたのでそこに座り書類を取り出した。

マレーナが興味深々に覗き込んだのだが、日本語で書かれている為読めずに少しがっかりしていた。

「それで……どういった方法ですよ？」

「ええ……簡単に言えば農法の改革と輸入する商品の開発です」

カティが退室した後草案を聞かせ、議論を重ねた上で算出された初期投資費用が捻出可能か尋ねた。

「そうですね……この第2案程度の費用なら可能ですわ」

「それではその規模で試験運用してみますよ」

「よろしく願いますわね。……それと圭介様、婚約披露会を5日後に行ないたいのですが……」

一瞬身を硬くしたが、マレーナに気を使わせまいと平静を装い了承した。

この後は関係部署へ要請のため挨拶に向かって部屋で休む心算だったが、ティーナと話をする必要がありそうだ。

「お忙しい中すみません、ハイドフェルド将軍」

「いえいえ、ようこそおいで下さいました、顕現者様」

私は労働力として兵士を借りるべく、エルンスト・フォン・ハイドフェルド將軍の下を訪れた。

自分の体が小さくなってしまったせいもあるのかもしれないが、ハイドフェルド將軍の体はやたら大きく、その顔も髭を生やしており雰囲氣的には『三国志の張飛』といった感じだった。

しかしその物腰からは『猪突猛進』等と言う印象は受けず、欧米だからなのか執事長のクリフと同じく紳士的な雰囲気をかもし出していた。

貴族には地方を代理統治する地方貴族と王都に住み王国の運営を補佐する中央貴族、そしてハイドフェルド將軍の様に軍を指揮する軍人貴族が存在する。

ハイドフェルド將軍は軍人貴族として伯爵号を持ち、先の国境付近で行なわれたバーゼルト会戦でも第6軍団長として参戦した。

しかし出兵した第1から第8軍団のうち最も損耗が激しく、現在是他軍団への編入の話が上がっている。

「実はハイドフェルド將軍に折り入ってお頼みしたい事があるのですが……」

「ええ、マグダレーナ王妃様よりお話は伺っております」

ハイドフェルド將軍は親王派として知られているらしかった。

マレーナの下から直接此処に向かったわけではないのに、既にマレーナから話は届いているらしかった。

『親王派の軍団が最も損耗率が激しかった』という部分にいささか人為的なものを感じないでもないが、今は兎も角も要請が先だ。

「もとより王国軍は王家の軍、要請があれば何事であろうと従いましょう。そもそも我が軍団は損耗激しく、軍団として機能は致しません。見えない壁のお陰で戦争もしばしの間は起こらないでしょう。兵士達も、自分が食べるパンの為となれば厭う者もおりますまい」

「そう言って頂けると大変助かります。ただハイドフェルド將軍にはもう一つの意味も知っておいて頂きたいのですが……」

「ほう……？　もう一つの意味ですか？」

そう、この要請にはもう一つの意味がある。

この国は王家の正当性を大儀に掲げ、敵国であるローゼンバーク皇国はヘレナ神の教えという大儀を掲げている。

兵士を指揮する者は貴族としての矜持を掲げ、それらに指揮される兵士達はそういう戦い方しか教わっていない。

騎士道と似た思想なのか全軍が正面に向かい合い、馬鹿正直に正面決戦をするというのが一般的な戦い方だった。

兵士の数が劣っているのなら質を上げるか戦い方を変えるしかない、今回は新戦法を提案したのだ。

その内容というのは、要所に対する攻略、伏兵、陽動、罠の設置など少人数でのゲリラ戦だ。

それらを示すと流石に難色を示したのだが、正々堂々なんていうのは考え方の一つでしかない事を説明した。

「例えば將軍、私が居た所ではこんな考え方があります。女性と食事中に野暮な者達に絡まれたら謝ってしまえと」

「それはまた……こう言っては失礼ですが……なんとも卑屈な考え方ですな……」

自分よりも上位に位置する人物が居た場所に対する評価だったので、將軍は若干言い難そうだった。

「そうですね。男らしく颯爽と野蛮な者を倒せた方が凛々しいと思います。しかし傍らには女性が居るわけですから、被害がその女性に及ぶ可能性もあります。だから男として一番優先させるべきは女性の安全であって男達を倒す事ではない、という考え方です」

「ふむ……女性と同じように争い事を嫌う民の為には貴族の矜持は忘れ、卑怯と言われようが民の生活を護れ……という事ですか……成る程道理ですな」

全てを説明する心算だったのが、話の前半部分で理解されてしまった。

「え、ええ……それでも嫌悪感を拭いきれないと言うのであれば、理不尽な侵略に対する迎撃のみにその戦法を行使するというのでも構いません。もっとも、そういう戦い方もあるという提案だけで、具体的にというのは戦争の専門家ではないので私には分かりませんが……」

「……了解しました。こちらでもそういった悪巧みが得意そうな人間を探しておきましょう。ははは……貴族だ騎士だと言っても、男は元来悪戯が好きですからな、1人や2人はおるでしょう」

そういつてハイドフェルド將軍は、悪戯を思いついた子供の様に笑い出した。

その後私の話が気に入ったのか雑談を続けた。

『能ある鷹は爪を隠す』という慣用句を痛く気に入り、同じような言葉はもっと無いのかという言葉に『負け犬の遠吠え』という言葉を教えると、何を思い出したのか大笑いを始めてしまった。

「それでは將軍、そろそろ私は失礼させて頂きます。要請を受諾して頂いた件、改めて感謝します」

「いや顕現者様、なにを気に掛ける必要はありませんとも。しかし、思いもかけず楽しい時間を過ごさせて頂きました。これから私の事はエルンストとお呼び下さい」

ファーストネームを呼ぶ許しを得た私は、エルンスト將軍の下を

辞してティーナの下へと向かった。
婚約やその後に控える婚姻について本音で語り合う為である。

第7話：王女の告白

「こんばんわティーナ。今いいかな？」

「こんばんわケイスケ、どうぞ入って……今日はありがとう勉強になったわ。……それにしても珍しいわね、ケイスケが私の所を訪ねてくるなんて」

「ん？ ああ……まあそうだね」

元営業マン、口は達者で物を売り込むのも得意だが、モテた事が無い私にはこの手の話をどう進めたものか悩んでしまう。

「ケイスケが口ごもるって事は、お母様に聞いたのね？」

「あ、うん……王城に戻ってから言われてね」

少し沈黙が続き、間が空いたことで気まづくなってしまったが腹をくくった。

「まず、ティーナに聞きたいんだが……好きな人……好意を寄せている人とかはいないんだろうか？」

「好意？ ……いないわね」

なにか嫌な事でもあったのだろうか、ティーナの顔から表情が抜け落ちたような気がした。

「そ、そうか……じゃあ今後好意を寄せる相手が出来た場合は教えて欲しい、それまでに私が発言力を得て2人を祝福し王国を任せるように宣言するから」

「……それはどういう意味？」

意味が図りきれず邪推でもしたのだろうか、厳しい視線を私に向けてきた。

「そう……だね、どう言ったものか……知っての通り私には恋人がいるだろう？ 実際には『いた』になってしまうのかも知れないが……それに正直なところ、私はここに居る貴族の人たちの様に見た目が良い訳じゃない。今は15歳程度の姿だろうけど、この顔から将来見目麗しくなるとは思えないよね？ だからティーナの様に綺麗な女性の夫になれるというのは、とても喜んでしまう事ではあるんだ」

「……それで？」

「私も男だから綺麗な女性の夫になれたり、何人もの女性をなんていう生活を羨ましいと感じる事だってある。でも、この容姿に31年付き合ってきたからね、そんな自分を愛してくれる女性が現れれば一途にその女性しか見えなくなる。その後に離れ離れになってしまった私だからこそ、相思相愛の人を引き裂く真似はしたくない。だから王国の為に婚約してしようが、好意を寄せる相手が出来た場合教えて欲しい」

私の話したい事が理解出来たのだろうか、ティーナの顔には表情が戻り、それでもどこか不安そうだった。

「ケイスケは私の事は嫌いなのか？」

「いや、そうじゃないよ。嫌いなのはないし感謝もしている。私の考えている事が上手く行って、王国が世界一発展して、マレーナ王妃がホクホク顔になったりすれば、ティーナも私に感謝してくれるかもしれない……うぬぼれかも知れないけどね、でも……感謝はしても異性として好きになるかどうかは別でしょう？」

「そう……そういう事ね……ケイスケの言いたい事は分かったわ。でもケイスケ、一つ言っておくわ」

「なんだい？」

「私は……お母様が執務室に籠る様になってからケイスケが現れるまで、貴族達の陰口を聞きながら暮らしていたの……私は、ケイスケが現れるまでお母様以外の周りの人間は敵だと思いながら暮らしてきたの。……だから私が貴族という人たちに恋心を抱くような事はありませんわ。私がティーナとして話が出来るのは、お母様とケイスケとカティとクリフだけ……そして本当に心許せるのはお母様とケイスケだけ」

「そう……」

人間の嫌な部分を見せ付けられてしまったからだろうか、ティーナの世界はとても狭い。

優子と離れ離れになってしまい、世界の全てに悲観していた私の心を救ってくれたティーナ。

そのティーナの世界が狭いという事実がとても悲しく感じた。

「だから異性として好意を寄せる相手となれば、ケイスケしか居ないでしょうね」

「うえっ！」

私が神妙な顔をしていると、とつぜんしたり顔になって爆弾発言をしてきた。

「あはははは、ケイスケでも慌てる事ってあるのね。ステーキにドレッシングをかけて食べても、慌てず騒がず『美味しいです』って言ったのに。あははは」

「そ、その話はもう勘弁してくれ……」

ティーナが気を利かせてくれたのだと思う、会話が暗くなりがちだったが笑いが漏れた。

雰囲気も軽いものに戻り、少し雑談した後部屋を辞した。

その日、部屋に戻りベッドに身を横たえると久しぶりに強烈な孤独感が襲ってきた。

婚約の話をした為か、軍などという分不相応な話をした為か、31歳の頃の全てが恋しくなった。

支えが欲しいと強く思った。

何時寝付いたのかハッキリしないまま強い光に照らされた。

同時に誰かが出て行くような気配がしたのだが、カティがベッドのカーテンを開けながら挨拶をしてきた。

「おはよう御座いますケイスケ様」

「んあ？ ああ、おはようカティ……今誰か居なかった？」

「いえ？ 私だけですよ？」

気のせいだと思ったし、眠いのでどうでもいいとばかりに再び布団に潜り込むと、カティが困った声を上げながら起こしに掛かってきた。

眠い目をこすりつつ朝の支度をし本格的に王様業に取り掛かった。

私は王国再建案として農法の改革と輸出商品の開発を行なう事を提案し、新農法の試験の為に試験農場を設置すること、輸出商品選定の為の情報収集を行なう事にした。

輸出商品として構想に上がっているのは、紙とアルコールランプだ。紙に付いては体験学習の時に見た事がある。

何かの木の枝から皮をはいで白っぽい内皮の繊維を叩き、脱色なのか何なのか灰を入れたお湯で煮た後川で洗っていた。

その後すこしトロミの付いた水の中に入れ、網のついた木の枠でバシバシやっていた。

なんの木だったか忘れたし作業方法も完全には覚えていないが、とりあえずで製作してもゴワゴワした紙が出来ると思う。

その後、植物の分布状況やら栽培のしやすさ等を考慮に入れ紙の製

作に適した木を選定し、製造方法を幾通りか試して記録を付け作業の見直し等を図れば、より上質な紙が出来上がると考えている。問題は、木の繊維を入れる水に入れていたトロトロした物がなんだったのか、説明していた時に友人と無駄話をしていたので聞いている、理不尽だろうがその当時話しかけてきた友人に腹が立った。

「そういうわけなので……クリフさんの知っている中、若しくはお知り合いの方にそういったトロトロした物を知っていないか教えて欲しいのです。第一条件は無色透明で水に溶け、希釈度に合わせてトロトロ感も薄まっていく事。欲を言えば手を掛けなくても大量に入手出来るものです」

「そうでございますねえ……幼少の頃そのトロトロした物を木の枝に塗って友人と引っ張り合いをしたり、その友人達と手をトロトロにして、女の子の手を握って泣かせてしまった事がありました……あれは何処で手に入れたのか……簡単に手に入ったのは覚えておるのですが……申し訳ありません、少々記憶がぼやけております様なので、その当時の友人達に尋ねる事に致します」

「そうですか、ご面倒をお掛け致します。しかし……クリフさん悪戯好きだったのですね……」

「ははは、お恥ずかしい。近所では悪ガキグループの一員でした。それでその友人ですが、王都に居を構えている者もおりますのでお気になさる事は御座いません。私も久しぶりに思い出した悪戯の話をしてきたいと思います」

確証は持てないが希望は見えてきた。

最悪海草の表面の粘膜を使うか、魚の表面の粘膜という方法も残されている。

次にアルコールランプだ。

入れ物は金属でも構わないので、問題となるのはやはりアルコールの精製である。

工業用ケミカル用品の卸売り販売という仕事柄、その手の情報はよく耳に入ってくる。

商品説明の際の基礎知識として会社から資料を渡される事もあるし、得意先で教えてもらう事もある。

それに『ガソリンの高騰によりバイオ燃料に注目が集まる』等というニュースも世界的に有名だ。

アメリカのモータースポーツであるインディーはアルコールを燃料としている。

誰でも知っているアルコールはエタノールで、簡単に分類すれば飲めるアルコールだ。

穀物や果物が発酵して出来る酒類に入っている。

そして、今回作ろうとしているのは飲めないアルコールであるメタノールだ。

別命を木精と呼び、木炭を作る際に煙と一緒に立ち上る水蒸氣に含まれている。

炭焼窯の煙突を工夫し、出てきた水蒸氣を冷やす装置、そして採取した液体を蒸留する装置が作れば純度は低くてもメタノールは得られる。

それら全ての作業をする為の人員を確保するべく、マレーナの下を訪れた。

「お忙しい中すみません。昨夜の件なのですが……」

「試験運用の為の人員の募集でしたわね？」

「ええ、農業に携わり農業について詳しい者1人、この人は出来るなら農耕馬を所有していてまだ種まきが終わっていない者が望ましいですが……周辺の人間の不評を買わない為、それと募集に対して人が集まり過ぎない為に雇用条件を少々悪い設定にしました。昨年の収穫高の8割程度の賃金で、労働力を含めた資材全ての1年間の借用です」

「その様な条件で応募が来るでしょうか？」

「恐らくは来ると思います。それに、それでもいいからという位生活が貧窮している者の方が、周りからの反感も少なくてすみますから。もしこなかった場合は、改めて条件を変えれば済むだけです」

今この国の人達は皆苦しい状況にある。

しかしその中でも幾分か余裕がある人間は居るわけで、余裕がある者がより裕福になるというのは回りからの反感は強くなってしまふ。それに好条件を出してしまえば参加希望者が増えてしまい、初期費用では賄いきれず国による選別という反感の種を蒔いてしまう結果になる。

「次に雑務全般をしてもらう者2人と炭焼の技術を持つ者が1人、農業試験の募集もですが夫婦の方が望ましいです。募集を掛ける際、食事だけは食べていけるという条件で募集してください。募集で確保出来た人達が夫婦だった場合、その奥さん達には王城の一室か小屋で紙の開発作業に参加してもらいます。どなたかが独身者だった場合、加えて女性の方を不足するだけ同条件で募集してください」

「わかりました。早速募集を知らせる早馬を出す事にしましょう」

これで人材の雇用に付いては一段落着いた。

「それと王国にはお抱えの職人と言うのはいるのでしょうか？　こういった物を作って欲しいのですが……」

「王城に出入りしている商人はおりますが、職人はおりませんね。どういったものですか？」

私はマレーナに冷却と蒸留の装置を書いた紙を見せた。

それは槽の左右の壁を繋ぐように、数本の銅管が傾斜しながら曲がりくねって走っている金属製の水槽で、コレを冷却装置として考えている。

もう一つは、木製の蓋で密閉できる寸胴鍋程度の大きさの鍋2つ、その間を繋ぐ為の銅管1本だけを使用した縮小版冷却装置1つである。

「コレが冷却装置で、この銅管の中を煙が通過するわけです。それでこの水槽の中に水を入れてありますので、冷やされて油のようなものと水のようなものが滴り落ちてくるわけです。次にこちらですが、先ほどの装置で手に入れた水のようなものを暖めます。当然湯気が出てくるんですが出口がここしかないので小さな冷却装置みたいな物の中を通過しながら隣の鍋に湯気は逃げて行きます。しかし当然冷やされるので湯気は再び水に戻るのです」

マレーナは『水が湯気になりまた水に戻ったからといってなんなのか』と不思議そうにこちらを見ていた。

そこで元々の水のようなものの中には水と燃える水が入っている事、燃える水はすぐ湯気になるのでこの方法で燃える水だけ取り出せるのだと説明すると、とても驚いていた。

「実はワインにも燃える水がはいっているんですよ。別に体の中で燃えるわけじゃないですが、ワインを飲んで体が温くなるのはその燃える水が入っているからなんですよ」

「そうなのですか!？」 燃える水とは……という事はワインで同じ事をして燃える水が得られるのですか?」

「ええ、得られますよ……まあ、ワイン等は高いので勿体無いから使いませんが……それとも装置が出来上がったら装置の試験の為に安いワインか何かで試してみますか?」

そういうと『是非に』と興味津々で実験要求をしてきた。

特殊な品である為商人を介さず直接職人に頼んで欲しい事と、その際に幾らになるかも結果を教えて欲しい事を頼んだ。

その後馬車に乗り王都の外縁部へと足を向けた。

王城との往復の際時間が掛からず、試験農地として適度な広さがある所を選定条件に探したが、最適と思われる場所は全て埋まっていた。

ただ一箇所、元は裕福な農家だったのだろうか、大きな住居と荒れ果てた畑、それと資材倉庫のようなものが空き家となっていた。

近隣の住民に尋ねると、夫は流行病で他界し、枯れ切った土地は何も育たず、生活が出来なくなった為2ヶ月程前農耕馬を売り払い、子供達と一緒に山間部にある実家に戻ったのだそうだ。

腕時計を見ると午後2時になっていたので一旦城に戻り、第6軍団長ハイドフェルド將軍改め、王立遊撃軍エルンスト將軍の下を訪れると『こき使ってください』と100名の兵士が待機していた。

「小難しい事は何も言いません。これからする仕事は農作業と土木作業です。私も含め皆さんもパンや肉をたらふく食べる為の第1歩だと思ってください」

「はい！！」

兵士達が一斉に返答するのを聞くと早速先ほど選定した場所に向かわせ、既に午後だった事もあり住居や倉庫や畑の整備をさせた。私は現地に向かい一緒に作業をする前に、軍馬の厩舎へと足を向けた。

その厩舎で馬の世話をする者に話をし、軍馬の出した排泄物を定期的に試験農場にある資材倉庫へ搬出する約束を取り付けた。

数日中には鶏糞の入手先を確保し、いずれは魚カスや貝殻等の入手ルートを確立させ、農法の幅を広げようと思う。

選定場所に向かうと既に作業は開始されていた。

住居は掃除をし人が住める状態にし、畑は雑草と小石を除去する。一度畑の中に入り、近くに置いてあったスコップを手にとると畑を掘り返した。

話に聞く通り土はサラサラと砂のようで、土中の虫も少ないようだった。

畑と倉庫を担当していた兵士達を集め、今日の作業内容を指示した。

「まず畑を担当している人達は、雑草と小石を除去した後適当に掘り起こして耕して欲しい。その後時間が余ったところにある麻紐を使って畑を17等分にして、その境界線には大体700ミル（70cm）程度の深さの溝を掘っておいてくれ。そこには後で石を敷き詰める。倉庫を担当する人達は邪魔な物を外に運び出した後、入り口以外の3方の、天井付近の壁の石を窓をつける様に幾つか抜き取って欲しい。それが終わったら入り口の壁の石を抜き取って、出来るだけ大きく入り口を広げてくれ。後日職人を呼ぶか補強用の木材が到着すれば正面の壁を撤去する予定だ。特に倉庫担当は危険な作業も含まれるので怪我しないよう注意して欲しい」

「了解しました！」

第8話：畑の下準備

試験農場を開く為一日中動き回り、翌朝起きてみれば多少筋肉痛になっているようだった。

ぎこちなくベットから起き出し朝の支度をする、早速次の段階へと進めるべく選定地に向かおうとした。

「顕現者様、お待ち下さい」

「あ、クリフさん。おはよう御座います」

「おはよう御座います、顕現者様。過日ご要望のありましたトロトロする物の件を尋ねてまいりました」

「あ！ 分かりましたか？」

「ええ、私の生家はクリストフ・ヴェイランドという名前からもお分かりになります通り、急行馬車で王都から東へ4日程の所に位置するヴェイランドという街なのですが、疫病が流行ったという事で友人共々一時期祖父母の家に預けられたことがあったのです。そこはヴェイランドから更に東へ1日と半日程度行ったところにあるベインソンという河沿いの村なのですが、その河に群生していた雑草からとったものでした」

恥ずかしながら、生まれた街が姓になると言うのを初めて知った。恥ずかしいのでその事は黙っておき話を聞くと、今もあるのか分からないし、この季節に生えているものなのかも分からないという事だった。

その為、早馬なりで早急に存在の有無を確認する必要があると判断し、その件をマレーナに依頼するべく執務室を訪れた。

「忙しいところ済みません、マレーナ王妃」

「いえ構いませんよ、わたくしも今来たところですので」

「そうでしたか、実は紙の製作についてなんですが……」

そう切り出して事の次第を説明すると、早速手配しようと言
って命令書を書いてくれた。

「そういえば……発注しておいたあの装置なのですが、見積もり金
額と共にこのような絵が送られて来たのですが……」

どうやらアルコール採取の道具の見積もりが届いたらしいのだが、
なにやら絵が添付されているとの事、受け取ってみて見ると、それ
は装置の図面だった。

さすが職人と言わべきか、より製作し易く整備もし易そうな設計図
を送ってきたのだ。

前に冷却装置の概略図として、水槽の中を通る曲がりくねった銅管
を書いたのだが、そもそも管を作ることが難しく、その上曲がりく
ねているとなると製作も困難な上に、銅管内の清掃等の整備性が
悪いと指摘が書いてあった。

「流石に専門家は考えることが違いますね」

「そうなのでしょうか？ わたくしには、そういった物をを発案な
さる圭介様に驚きを感じるのですが……」

「ははは……」

より進んだ文明社会に住んでいたというズルではあるのだが、褒
められれば悪い気はしない、ちょっと照れた。

それは兎も角、確かに真っ直ぐの管なら製作も簡単だろうし、後々
の管内の掃除も楽だ。

しかし私もいたずらに曲りくねった管を書いた訳ではない。

車のラジエターやエアコンのフィン、冷蔵庫の裏の冷却装置や湯沸
かし器の中の銅管等、熱を逃がして冷却したり、逆に暖めたりする

物の内部というのは、曲りくねった管で構成されている。

曲りくねらせる意味と言うのは、暖めたり冷やしたりする媒体の表面積と、その影響時間を稼ぐ為なのだ。

しかし送ってきた設計図には、管を曲げることなく表面積と影響時間を確保する方法が書いてあった。

煙突に繋げる為の真っ直ぐな太い銅管が一本あり本来出口となる場所が塞がれている。

銅管の途中に8個程一列に穴が開いており、そこに細い銅管が繋がっている。

その8本の細い銅管は、傾斜しながら石と土壁で出来た水槽の反対側まで真っ直ぐ突きぬけていた。

反対側には、煙突に接続する銅管と同じ太さの銅管があり、こちらの銅管は両側を塞がれている。

側面には16個の穴が8個1列として並んでおり、片方の列には水槽を通ってきた8本の銅管を、もう片方は再び水槽を突き抜ける銅管を繋げる仕組みだった。

最後には煙突と接続する銅管とまったく同じものがあり、8個1列とした穴に水槽を突き抜けて来た細い銅管が繋いである。

最後の銅管で全ての銅管の液体を集め、出口から液体を採取するという仕組みだ。

試してみても直ぐに冷えるようなら1段にすれば良いし、冷えないなら3段位折り返せばいい

パイプも全て真っ直ぐなので、煤で汚れた際には全て取り外して洗うのも簡単だ。

蒸留の為の装置も、間の水槽が金属製なだけで、コレと同じような仕組みだった。

現在分かっている材料費と手間賃等で250リマ、一般人の月の給金の2か月分と同じくらいなので、日本円にして40〜50万だろうか、やたら高い気もしないではないが、特注品なので仕方ないだろう。

しかも、これには銅管を作る手間賃が入っていない。
管にするというのがどの程度難しいものなのか、やってみないとわからない為だそうだ。

「成る程……これなら後々楽ですね。しかし……やっぱり試験農場の方で経費を押さえておいてよかったですね……」

「足りないようなら何とか捻出してみますが……?」

「いえいえ……元商人ですからね、お金に関しては厳しい考えを持ってますので、最初の取り決め通りにしましょう」

そう言って部屋を退室し、ようやく今日予定していた作業に掛かるべく現場に向かった。

その際、エルンスト將軍の計らいで倉庫整備に80名、本日予定している森林からの腐葉土採取に40名と、昨日より20名多い兵士を派遣してくれた。

「あ！ ティーナ！」

「ふふふ、待ちくたびれたわよケイスケ」

荷馬車に揺られて王都の直ぐ傍にある湖に到着すると、ティーナが待っていた。

「どうしたの急に？　　というか来るなら一緒に来ればよかったのに」

「今日は王城の執政官達との会食があったんだけどね、逃げ出して来たのよ。だから一人でこっそり来たの」

「え？　じゃあマレーナ王妃は知らないの？」

「そうね」

「そうねって……」

「どうやらティーナの貴族達に対する壁はかなり厚いようで、顔も合わしたく無い程らしい。」

「今日も作業を手伝いつつ、色々観察しようかと思ったのだが、ティーナに終始質問攻撃を受けていた。」

「暫くすると、馬車の中から私が日本語で書いたノートを見つけてきた。」

「いっぱいかいてあるわね、何が書いてあるのかはまったく分からないけど」

「ああ、この辺は国の情報の一覧とかだね」
「情報の一覧？」

「うん、国名ハルトヴィック王国、面積の所はまだ空欄でいずれ調べなきゃならないね。その下の何も書いてないところも、住んでる人の数と主な産業……ここには農業と畜産と書いておいたんだよ」

「へえ……こうして見ると、ケイスケの目から見たら王国もまだまだ調べなきゃならない事って多いのね」

「その後も、なぜ森に來たのか、腐葉土とはなにか、国土調査と世帯調査の意味と必要性等を語って聞かせた。」

「営業でも、担当エリアに得意先となり得る世帯、若しくは店がどの位あるのか、というのは大切な情報だ。」

「地理を覚える、若しくは調べるというのも、効率的な巡回ルートを確立させる為に必要な事だし、ましてやそれが国家となれば、その情報の重要性はもっと上がる。」

「世帯調査を行えば見込める税収の額がすぐに分かるし、人材を捜す際にも役立つ。」

「国土調査を行えば、居住区若しくは穀倉地としてのキャパはどの程度か、無駄になっている土地はあるのか、等が分かってくる。」

「でもなぜ今調べないの？ 数人の兵士を國中回らせるだけなんだ

もの……国土調査？ 位は直ぐ出来るんじゃないの？」

「まあ予算のこともあるし、なにより代理統治している場所を調べられるってのは嫌がられるだろうからね」

営業でもそうだろうと思う、担当エリアでの業績は仕方ないにしても、上司に調べまわされて『営業しきれていない場所がある』等と言われるのは、仕事のことは当然のことでも余りいい気分ではなかった。

そう言った事を説明したのだが、ティーナは暫くブツブツ言っていた。

「まあティーナは好きではないだろうけどね、昔の仕事からの経験で『どんな人間だろうと反感を買うような事はせず、嫌いな人だろうが利用して人脈を広げろ』っていう持論があるんだよ」

その後人脈を広げる利点を教えると、渋々ながら納得していた。しかしティーナの指摘のとおり、するべき事はまだまだ沢山あった。全てを効率的にするならば、あらゆる物の数値化と言うのは必要な作業なので、今行なっている作業に目処が付いたら考えなければならぬ。

そうこうしている内に腐葉土集めは終了し私達は王都へ帰還した。

「さて……畑と倉庫は兵士の皆がやってくれてるので、私は……つとそうだティーナ」

「なに？」

「私はまだ兵士の皆に頼まなきゃならない事があるんだけど、ティーナはクリフさんに『王城で使われた魚の骨と卵の殻は捨てないで下さい』ってお願いして来てくれないかな？ それも畑の栄養になるんだよ」

「へえ、わかったわ」

そう言ってティーナと別れ、馬車で走り去るのを見届けると、兵士達を集め新たな指示を出した。

「誰が行くかは任せるけど、20人程で近隣の養鶏家……鶏肉にする為でも卵を得る為でもいいけど、鳥を育てている所に行って糞を売ってくれないか聞いてくれ。それとは別に誰か炭を持ってきて欲しい。あと残りの人たちは17等分して縦長になった畑を更に3等分して、合計51の小さな畑にして欲しい」

先日は作業の進行速度が分からず17等分と指示したが、人数が多くてさっさと出来上がってしまったので、それならばと更に小分けにするよう指示を出した。

適当に等分にしてもらったのだが、1面が結構な広さだったので51に分割すれば1つが14平方メートル程度の大きさになりそうだった。

倉庫の方も簡易的な窓は出来上がり、正面の壁の撤去もそろそろ本職か木杵が必要になって来ていた。

冷却装置の件や他の件を考えると、出費を抑える為に自分達で木杵を組む事になるだろうと思う。

炭を取りに行った者が戻ってくる頃にはティーナも再び顔を出し、畑の分割は程なくして終わった。

「炭なんてどうするの？ それも栄養なの？」

「これは栄養と言うよりも、栄養が少なくても野菜が育つようにする為の物なんだ。ただし、炭が無い方が良い野菜なんかもあるから、混ぜる分量を変えたり、そもそも混ぜなかったりして、どの野菜には何が必要なのか調べようと思ってね。そういう事まで知ってれば試す必要は無いんだけど……」

「いいえ、そんな事を知ってるだけでも十分よ。それに……まだな

にかやるんでしょ？」

「ん？ ああ……そうだね」

「そういえばケイスケ……もし時間が有ったらで良いんだけど、私にもケイスケの知ってる知識を教えてほしいの。お母様は政務をこなされて、ケイスケは私の知らない色んな事をし始めている……私も何かしたいの……テーブルマナーや貴族の嗜みは知ってても、私は大事な事は何も知らない……こんな時に何も出来ないのは悔しい……だからそれをケイスケに教えてほしいの」

私が知識を教える事で妙な事になりはしないか、極端に言えば思想の変化等、予想もし得ない事に成らないかと少し危惧したが、それはそれで選択肢が増えるだけで決めるのはティーナだなと考えた。それに、ティーナが私を見る顔には、全ての心情を理解する事は判断出来ないが、並々ならぬ決意が現れているようだったので、私程度の知識を教えてくれという願いを断るのも忍びない、という思いもあったからだ。

「そうだね……元商人で人と話するのが商売みたいなものだから、色んな話は知ってる。けれど話題づくりの為に得た知識だったりするからね……専門家じゃないから詳しくは知らなかったりするけど……それで良ければ教えるよ」

「本当！？ よかった……」

この世界に來た当初は私が生徒だったが、今度はその立場を変えて授業が行われることになった。

いずれ機会があれば特別講師を呼ぶのも良いかも知れない。

第9話…圭介先生初授業

試験農場開設の下準備を始め、木材が届く明日には倉庫を改装した堆肥保存庫が完成する。

畑の方も、纏まった量の鶏糞が手に入れば種まきを開始できる。

ある程度の所まで漕ぎ付け、木炭もあらかた砕き終わった頃には、辺りが暗くなり始めていた。

本日の作業を終え王都に戻ると、何時もの様にカティが出迎えてくれた。

「お疲れ様でしたケイスケ様。クアラ茶を用意してありますのでお召し上がり下さい」

「ん、ありがとう」

早速今日からティーナに教えるのかと思ったのだが、王都に戻るとマレーナが待ち構えており、笑顔でもってティーナを引き連れていった。

ティーナが手を引かれながら『ケイスケに教えてもらおうの』等と、切々と語り説得を試みていたのだが、マレーナが突如立ち止まり私を見ると『ティーナが顕現者様に教えを請うのは、明日からになりましたので、本日はゆっくりお休み下さい』と、一言残して立ち去って行った。

私に向けられた怒りでは無いだろうが、美人が怒ると怖いと言うのを嫌と言うほど味わった。

「カティも座って一緒に飲もうよ」

「はい、ではご一緒させて頂きます」

待機されるより一緒に飲んだ方が私が喜ぶと言うのを理解したの

だろう、最近では特に拒否することも無く同席してくれる様になった。

「この後のご予定はあるんですか？」

「んゝあったんだけど無くなってるね。ノートも纏めたいからまた色々教えてくれないかな？」

「私でよければなんでもお答えいたしますよ」

「良かった、ありがとう。じゃあ、コレは私からの給金だ」

そう言ってお茶請けとして出されていたクッキーをカティの前に差し出した。

嫌いだったのかと心配されたが、甘いものは少しあれば言いと継げると少し安心したようだった。

「また、皆に内緒の事がふえちゃった……」

「皆に内緒？」

「あ！ えへへ……私ケイスケ様のお付になってから王妃様とお話が出来たりして、メイドの仲間達にその事を自慢したのですが、流石に『顕現者様と同席してこんな高級なカップでクアラ茶を頂いた』とか『お菓子を頂いた』とかを自慢なんかしたら、メイド長に怒られてしまいます。だから皆には内緒の話なんです」

「ははは、そうか」

『カティが他のメイドに自慢している』そんな微笑ましい光景が目に見えようだった。

こういうのを『癒し』というのだろうか、思えば私がこちらに来てからというもの、カティが私の精神的な支えと言うか精神安定剤になっていた。

当初は目に映る世界に戸惑っていたし、今ではタイミングを逸した感じがして年齢は聞いてないが、恐らく14〜5歳だろうと思う。

まだ『女の子』という言葉が相応しいのに不思議な包容力を感じる。彼女が居なければ私はもっと錯乱していただろうと思う。

そういう一面もあるのに、今日の前に居るカティは『美味しいクッキーに目を輝かせる女の子』だった。

若干リスにも似た小動物を連想させられる。

こういうのもある種の『癒し』なのだろうか。

「あ！ えー……すみません……とても美味しかったのでつい……」

「え？ ああーいいんだよ食べちゃって。ごめんねちょっと考え事してたんだよ」

考え事をしながらクッキーを食べるカティを眺めていたが、なにやら勘違いされたようで、カティが顔を紅くして照れだした。

クアラ茶を飲んで一服し少し疲れも取れた為、夕食までの間に今日分かった事を纏めようとノートを取り出した。

まずは人の姓が生まれた街に由来する事を書き加えると、ページをめくりフリーハンドで書いた地図に、クリフから教わった草が生えているだろう場所に印をつけた。

ハルトヴィック王国の領土を簡単に説明すれば『いびつな四角』と表現出来た。

領土の中心地点から見て南南西の位置には、エルフが治める隣国『モルダウ』から南北に連なる山脈があった。

その山脈があるお陰で鉄、銅、銀、金等の地下資源を自給出来ている。

領土の中域まで張り出したその山脈を囲うように森が存在し、その森からは国内の木材需要を賄い、製鉄に必要な木炭等も生産されている。

そしてその山脈からは、国土の大半が森であるモルダウ国はもとより、ハルトヴィック王国にも4本の川が流れ込んでいる。

山脈からモルダウとの国境付近を西へ流れる川、山脈の西側は海が

近い為、その川はすぐに海に到達している。

「そういえば山とか川とかって名前付いてるの？」

「お城から見える山はヘレナ山と呼ばれていますよ、川は地域ごとに異なった呼び方があるので、決まっているわけではありませんね」

なんともおおらかな話だった。

しかしそういう事ならと、山脈に『ヘレナ』と記入した後、国境付近を流れる川に『西境川』と名づけておいた。

その他には、山脈の北端から北にある王都に向かって流れる川があった。

この川は王都のすぐ傍で湖を形成し、湖から流れる方向を西に変え海に流れ込んでいた。

この川には王都付近で湖として水を溜める事から『溜都川』と名づけておいた。

その他にも、山脈の東側の斜面から北北東へ領土を縦断するように流れる川、領土を縦断しクリフに教わった草があるそうなので『縦草川』と、同じく山脈の東側斜面から森の中を東へ流れ、途中で南東へと曲がりモルダウへと流れていく川には、流域全てが森である為『東森川』と名づけた。

山や河川の名前を付け加えられた地図を一度眺めたが、和洋折衷もいいところだった。

我ながらセンスが無いとも思ったが、分かれば良いと思い直しそのままノートを閉じた。

「それでカティ、聞きたい事というのは魔法のことなんだ」

「魔法ですか？」

「うん、まず私は魔法をつかえるのか？ という事なんだ。今まで色々ありすぎてその事を考えなかったけど、ふと思いついてね、使えなくても構わないけどハッキリさせておこうと思って」

使えるならそれに越したことは無い、しかし使えなくても一向に構わない。

そして結果的に私は魔法を使う事が出来なかった。

子供の頃には誰でも見えていた精霊が、凡そ6〜7歳になると見えなくなるという。

しかしその時期を過ぎても精霊が見えている者が、精霊の力を借り受ける事が出来る様になるそうだ。

純真な心を持っていたり、純粹な想いを持っていたりすると、6〜7歳以降も精霊が見え続けると考えられており、人里離れた山村等に精霊が見える者が多く居るというのが、その説の有力な証拠になっているらしい。

そして次に魔法の種類だ。

前にカティに聞いたところ、水とか火等の自然にある物を、防壁ないし攻撃手段にする、という魔法しかないという事だったのだ。

しかし、今思い返してみれば例の『帰転』も魔法ではなからうかと思っただのだ。

「いわれて見ればそれも魔法でしたね……申し訳ありません」

「いやいや、いいんだよ。それに『カティがあの時帰転の魔法に思い至らなかった』というのもある意味では貴重な情報だからね」

教えられなかったのに、なぜその事が有益であるのか分からずカティはキョトンとしていた。

「カティが思い至らなかったという事は、頻繁に行使されるような一般的なものじゃないって事になるよね」

「そういえばそうですね……私は帰転した方すらお見かけしたことがありますから」

私は魔法が使えなくても構わないと考えている。

確かに魔法が使えれば、戦闘面で有利になる事は容易に理解できる。しかし、王様になるのなら自分が戦闘に参加するという事は無いだろうし、仮に王国が崩壊し王様じゃ無くなったとしたら、私は生きる目的を失ってしまう。

今私がここに居るのは、衣食住と生命そのものを守られ、私に良くしてくれる皆に対する恩に報いる為にいるのだ。

今の話を聞いて『もしかしたら帰る方法がある』という事を考え少しだけ希望を感じた。

落胆を深くしない為に意識して否定的に考えようとしているが、一般的ではない魔法があるという事実は、知られていない魔法が存在する可能性があるという事だ。

しかし、その希望の種があるとするならば、人間以外が統治する場所、王様でしか手を伸ばせない場所だろうと考えている。

マレーナが嘘を付いているとは思えない、もし嘘を付いて帰る方法を隠蔽していたら、悔しくも思うがそれはそれで帰る方法が目の前にあるのだから僥倖だ。

マレーナも一国を預かる身ならば、腹芸の一つも出来るだろう。

しかし、もし方法があるのなら隠蔽ではなく餌にする方が効果的だ。だからこそ、もし本当に帰る方法があるのなら、人間が統治する三国以外、外の世界にそれを求めなくてはいけない。

もしあったとしても、そこに至れる可能性は低いと思う。

試験農場で簡単な試験結果が出るのが1年後、紙の製造販売等で肥料等の購入資金が潤沢になったとしても、堆肥の発酵期間や、新農法を全域に広める際のタイムラグを考えれば、順調に結果を出し『国中の胃袋を満たす程の豊作』という結果を出すまでには、最低でも今から3年後だと思う。

その上で人口が増え、比例して軍事力が増し、国土の安全を維持しつつ『帰る方法の探索』という国家運営となんら関係の無い事にまで手を伸ばせる様になる迄には、一体どれ程の時間が必要なのか皆

目見当も付かない。

夕食の後になってもそんな事をあれこれ考え、時折思考が脱線しながらも寝るまで考えることに没頭していた。

「おはよう御座います、ケイスケ様。本日は雨のようですよ」

「ん？ おはよう……しかし、毎日カティの顔を見る事が1日の始まりというのも妙な気分だね」

「ケ、ケイスケ様！」

別に惚れたとかそう言ったことではないが、毎朝起されて始まるという事が新鮮だった。

今でもそれなりに忙しいが、元の世界では目覚ましに叩き起こされ、時間に追われ朝飯も食わずに営業に向かう毎日だった。

夕方になり営業所に戻れば一日の業務日誌を書き、明日の予定を立てて準備を済ませ、家に帰宅するのは決まって夜の9時とか10時だった。

それがこの世界に来てからは、朝8時に起され、夕方まで作業等をして王城に戻れば夕食が準備されている。

夕食を食べた後には思いついた構想等を纏めてみたりする。なんとも優雅といえば優雅だった。

「……仲がいいのね」

「うおあ！」

そんな事を考えながらカティの慌てる姿に癒されていると、突如背後から声が聞こえてきた。

「ティ、ティーナ……おはよう」

「おはよう、ケイスケ。今日は雨だから作業は中止するらしいわよ？ だからケイスケの話を聞けなかった分、今日は一日中付き合っ

てもらうわよ?」

「あ、ああ……うん、分かった。準備するので待っててくれ」

『婚約者の目の前で他の女の子と朝の語らいをする』等という不謹慎極まりない行動に怒るかと思ったのだが、特にそういったことも無く、空回り気味に1人勝手に戦々恐々となった自分がむなしかった。

「そうだなあ……ティーナは何が知りたい?」

「何でもいいわよ、そもそも何を聞けばいいのかも分からないし」

そういえばそうだなと頭を悩まし、自分の学生時代の事を思い出したので1時間程度で科目を変えろという方式を取った。

ティーナとカティへの授業は簡単な世界史から始まり、今行なっている試験農場の事を説明する為に食物連鎖等の生物学を説明した。目に見えぬ微生物や菌類等が存在し、それらが動物の糞や枯れ草を分解する事で草木の栄養になる事を説明すると、驚きながらも何処か納得していた。

その他にも、蒸気機関や電気等の動力装置、電話や無線等の通信機器の事を説明すると、無早開いた口が塞がらないといった様相を呈していた。

「それを作ったら凄い発展するじゃない!?」

王女という肩書きどころか、女性という事すらかなぐり捨てるかの如く私に詰め寄ってきた。

鬼気迫る形相をした美人の女性に詰め寄られるという初体験に、かなり腰が引けてしまった。

「そ、そうだね……でも作ろうと思ったら何度も実験をしなきゃな

らないし、お金が掛かるんだよ『仕組みをなんとなく知っている』
という知識と『実際に動くものを作る』という知識の間には歴然
とした差があるからね」

「……そう」

少し元気をなくしたものの、紙やアルコールの製造の事に思い至
ったのか、なにやら決意を新たに奮起していた。

その後ちよつとした算数等を教え、夕食の時間になった為私の授業
は終了した。

夕食後私はマレーナのもとへと足を向けた。

昨夜も考えに没頭し、授業を行なっている際も時折考えていた事が
ある。

それは『戦略』だ。

今まで私は状況に流されていた。

世界に放り出され、王様に祭り上げられ、何も知らないから教えを
乞うた。

国の現状を知り、恩に報いるため目の前の問題进行处理し、少しだけ
先の事にも目を向けた。

しかし、帰る方法を探る為には、国も私も大きくならなくてはいい
けない。

対処療法では大きくなる事など出来はしない。

営業も国も『戦略』という大きな方針を打ち出してこそそこに至る
道が見えてくる。

「マレーナ王妃。貴女の望む未来はどんなものなのですか？」

そんな言葉から始まった私とマレーナの議論は、元の世界では割
と一般的で、この世界では皆が寝静まる午前0時にまで及んだ。

第10話…圭介先生の授業2日目

気がつけば朝になり、何時もの様にカティに起され外を見てみれば、昨日とは打って変わって晴れだった。

「おはよう御座います、顕現者様」

「うん……おはようカティ」

私に対する呼称が『顕現者様』に戻っている事を不思議に思いつつ、上体を起そうとしたのだが気だるさ以上の億劫さを感じ、久しぶりに夜中迄起きていたので眠気が醒めないかと考えた。

昨夜マレーナに将来どうなりたいかを尋ねたところ、早急に三国を統一し魔族という強大な外敵に備えたいという事だった。

戦略とは『どうするべきか』からでは無く『どうなりたいか』から考えていく。

最大目標を設定した上で、そこから『どのようにして』という選択肢を選んで行き、今ある現実道に道を繋げるという作業だ。

これは営業でも同じ事で、売り上げでトップになりたいという目標であれば、担当エリア全域を営業にまわり、得意先では更に売り上げを伸ばす為、新規の場所では取引を開始する為に、あらゆるものを武器にし、様々な戦術を駆使して攻略していかなくてはいけない。そういった事からも、三国統一の為の方法はどういったものが望まれるのか、武力による支配か、それとも交渉による和平か、はたまた経済というもう一つの武器による支配かを尋ねた。

マレーナ自身も武力支配は望んでいないらしく、平和裏に事が進むのであればその方が望ましいとの事だった。

私も、自分の命令で多数の死傷者が発生する、という事態は遠慮しなかった。その点には胸を撫で下ろした。

そもそも最大目標が『外敵に備える』と言うのであれば、無用な血

を流し軍事力や国力を疲弊させるといふのは得策ではない。

「風邪なのでですから無理なさないで下さい顕現者様」

「……風邪？」

あれこれと昨夜の事を思い出しながら、モタモタと起きようとしていたが、やたら体が重く上手く行かなかった。

見かねたカティに背を支えられながら状態を起すと、私が風邪である事を告げられた。

「……やたら体が重いと思ったら風邪だったか……所でどうして顕現者様？」

「あ……いえ……その」

「何時も通りの呼び名で構いませんよカティ」

「うおわっ！」

今日も今日とて背後から突然声が聞こえ、振り返ってみるとティーナだけではなくマレーナも訪れていた。

「ああ……おはよう御座いますマレーナ王妃。おはようティーナ」

「おはよう御座います圭介様」

「おはようケイスケ」

二人が居る事に驚きつつ、そばに置いてあった腕時計を見ると、午前10時を示していた。

どうやら風邪で起きるのが遅くなってしまったらしい。

「お加減は如何ですか？ 圭介様」

「……正直なところ、少し体が重いですね」

「食欲はおありになりますか？」

「……はい、不思議ですがお腹はペツコリです」

「まあ！？ ふふふ」

全員が不安そうな、若しくは氣遣うような表情を浮かべていたが、食欲がある事を告げると安心していた。

何か用があったのか尋ねたが、戦争終了から約20日『戦後処理も終了し政務も少し落ち着き、明日の婚約披露宴の準備も指示を出し終わったのでお休みを頂いた』という事だった。

「実は今朝方、ティーナから蒸気機関や電気なる物を伝え聞いたのですが、要領を得なかったのでそれならばたくしも参加させて頂きましようと思ひまして参ったのです。ところが部屋に来てみれば圭介様が病を患っているとの事だったので、目的を変更してお見舞いをと」

「成る程……すみません、自己管理がなっていませんでしたね」

そういう事ならばと、ベットから起き出し着替えようとしたのだが、慌てた3人に取り押さえられベットに戻されてしまった。

「しかし……元の世界の営業という仕事でも、この程度で休んではたら仕事になりませんよ」

「「ダメです」」

全員に一息で却下され、起きたばかりで寝れない事を告げ、ベットの中で話をするというお互いの妥協点で話は纏まった。

そうこうしている内に私の朝食が運び込まれた。

野菜を煮込んだスープで消化によさそうなものだったが、ベットで食べる為の台が大人用で、腕も疲れ始めた為食べるスピードが極端に遅くなった。

それを見かねたカティが、スプーンでスープをすくい差し出してき

た。

所謂『あゝん』だ。

1人勝手に照れながらも、腹は減っているので啄ばむ様に食べていると、ティーナが声を上げた。

「カティ、私に貸してみて」

「はい、どうぞティーナ様」

何を思ったのかティーナかスプーンを差し出してきた。

気になってマレーナを見たのだが『いいもの見た!』とばかりに目を輝かせているだけだった。

「ホラ! 早く食べなさいよ」

「あ……うん、分かった」

そう言って再び啄ばむようにスプーンを口に含むと、ティーナが恍惚とした表情を浮かべた。

「ど、どうしたティーナ……」

「不思議ね……たったコレだけの事なのに、震えるケイスケに食事を与えていると、ケイスケの命を私が握っているという感覚がして……なにかゾクゾクするわ」

なにか間違ってるよティーナ。

この行為は決してそういうものじゃなくて『保護欲を刺激される』とかで照れる行為のはずだよティーナ。

表情も照れで初々しさを出すべきなのに、なんで妖艶さを出しているんだティーナ。

なにか色んな事を間違っている朝食を終え、私が話をし始める前にマレーナが報告と質問をしてきた。

「今日は晴れましたので、圭介様が行なっている作業が再開されます。陣頭指揮はエルンスト將軍が買って出てくださいましたので、話を聞く限りでは今日中に完成するそうですが、作業の際に指示すべきことは御座いますか？」

「そうでしたか……後でお礼言っておかないと……」と指示でしたね……植えるものは本来春に種を蒔く物、その中でも収穫量が増えてほしいものを5種類選んでください。それで炭を撒く量ですが……井戸から水をくみ上げる桶（約20リットル）がありますよね？アレに半分程度を最小として、1枚に半杯分を撒いた畑を10、1枚に1杯分撒いた畑を10、1枚に1杯半分撒いた畑を10、1枚に2杯分撒いた畑を5、撒かない畑を5、そのまま放置する畑を1枚作って置いてください、そもそも半分では足りないというのであれば最小は1杯分から同じように増やしていって下さい」

「わかりました。その様に指示を出しましょう」

それに加えて、鶏糞が届くのであれば、1枚の畑全域に撒ける最小とその1.5倍の最大量を設定し、炭を撒かない所は最大量を、炭が一番多い所は最小量を、それ以外で10枚単位で炭の量を変えた所には5枚一組として最小と最大を撒いて欲しい事を告げた。こうする事で、どの作物には何がどの位必要なのか絞込めるはずだ。

余った1枚は出るか分からないが井戸でも掘るか、小屋でも作って資材置き場にするか、必要に迫られてから考えようと思う。

そのような諸々の指示を出し終え、授業と呼ぶのはおこがましい知識の提供を始めた。

今日は新たな物を教えようと思ったのだが、マレーナとティーナのたつての希望により、蒸気機関と電気について語って欲しいとの事なので、カティにも了承を得て語りだした。

この勉強会を開く際、用済みとなり日時計のまま放置されていた学

習砂が役に立った。

「皆これを見て下さい」

そういつて皆に見せたのは、砂に書いたガソリンエンジンのピストンだ。

蒸気機関という名前は知っていても、どういったものだったのかは詳しく知らなかった為、工業用ケミカル用品の営業だった経験から、車のエンジンを説明に用いたのだ。

「こちらの密閉した容器に入った水を温めると湯気が出てきます。蓋をしたお鍋を暖めていると蓋がカタカタなりますよね？ あれが蒸気圧と言われる物で、蒸気の圧力が蓋を持ち上げています。その力を動力にしようというのがこの蒸気機関です」

「はい、それなら見たことがありますわ。お湯を沸かしているお鍋の蓋がカタカタ踊っているのを眺めていた事があります」

話してる内容がエンジンという男臭い事なのに、出てきた発言が『お鍋の蓋が踊る』という、とても乙女チックな表現だった事に微笑をもらしてしまった。

「はい、その力です。蓋を押し上げる力を持つ蒸気は、行く場所が無いのでこの管を通って行きます。その行き着く先にはエンジンと呼ばれる装置があります。エンジンには、蒸気を取り入れる口と吐き出す口、その口を開閉する皿に棒の突いた弁、その弁を開け閉めするカムシャフトと呼ばれるもの、このシャフトは、回ることです。中に付いたカムと呼ばれる卵型に膨らんでいる部分が弁についてる棒を押します。」

「ああ……昨日はよく分からなかったけど、これはレバーみたいなもののなのね？」

「そうだね、1回回る度に弁の棒を押し下げるレバーだと思ってくれればいいよ」

ティーナは昨日の1度の勉強会だけでは理解出来なかったようだが、マレーナは理解したようで、先に進む了承を得ると話を再開した。

「そしてこのカムにより棒が押されれば、当然下がるので弁が開いて蒸気が入ってきたり、吐き出されたりします。弁が開けば蒸気が入ってくるので、中央のピストンと呼ばれる動く丸い筒は蓋の時と同様、押されて下に下がります。そうすると丸い筒が繋がっているクランクシャフトと呼ばれる棒も周り、その棒に紐で繋がっている上のカムシャフトも回ります」

「これは紐ではなくて歯車でもよろしいのですか？」

「ああ、そういえば歯車でも構いませんね」

話の参考資料として持ち出したのが車のエンジンだった為、ベルトの変わりに紐で説明したのだが、よくよく考えれば歯車の方がわかり易かったかと考えを改めた。

「この上の棒が回ればカムが吐き出す口の弁を押し開くので、ピストンが押された力を利用して蒸気を吐き出していきます。そのタイミングで再び蒸気が入ってくる弁が開くので、丸い筒はまた下がる、というのを繰り返します。結果的に、丸い筒の下に付いたクランクシャフトと呼ばれる棒がぐるぐる回り続けるわけです」

その後クランクシャフトに車輪をつければ蒸気で動く車になるし、棒が回転するという動力を色々な事に用いれば、車を動かす事だけではなく、船を動かす事、扉を開く事、井戸から水を吸い上げる事、動力の応用次第で千差万別の働きをさせる事が出来るのだと説明を

締めくくった。

「す、素晴らしい装置ですわね……これは今すぐ作れるのですか？」

普通は皆同じ反応になるのか、それとも親子だからこそ同じ反応なのか、ティーナと同じ質問をしてきた事がおかしかった。

「いえ、実用化のためには蒸気が漏れないように密閉するための工夫とか、動く箇所が多いのもっと簡単な仕組みにするとか、耐久性とか色々と解決しなくてはいけない事もありますので、時間とお金が必要ですね」

マレーナは一瞬だけ残念そうな表情を浮かべたが、それでも誰も知らなかった知識をいち早く手に入れた優位性というものを理解し、すこし興奮気味な表情を浮かべていた。

その後、自分でもあまり詳しくない電気について説明を始めた。鉄の棒に銅線を幾重にも撒きつけたコイルという物を並べる。

「それともう1つ、鉄等がくっ付いてしまう性質を持つ金属があるのですが、旅をする際の方位磁針等のアレです。あの針は磁石なのですが、どんな磁石にも決まって北を向くN極と、決まって南を向くS極という方向性が存在します。そしてこのN極とS極を交互に素早くコイルに近づけると、コイルから伸びた2本の銅線に電気と呼ばれる力が発生します。この電気という物ですが……雨の日に空から青白い光が音と共に落ちてくる事がありますよね？」

「雷のことですわね？」

「ええ、その雷が電気なのですよ」

「ええええ！ あんな恐ろしいものが作り出されるのですか……？」

動かせば、雷そのものが発生すると勘違いしてしまったらしい、

私に対し『本当にこの方は人なのか?』という畏怖の表情を向けてきた。

「いいいえ、その装置で作りに出せる電気は、あんな凄いものではありませんよ」

それなりの出力で安定した電気を作ろうと思ったら、発想力のあつた人間を何人も集めても何年もおかる事だろう。

私の考へた装置を作つたところで、1・5ボルトも出たら御の字だろう。

そんな話を交えながら午前中は過ぎ去つていった。

午後が始めるのかと思つたのだが、流石に午後は休んでくれとのこと、お言葉に甘えてベットに身を横たえると、程なくして眠気が襲つてきた。

第11話..新組織？

ふと目を覚ますと窓から茜色の空が見えた。

結構な時間寝ていたらしく、傍らに置いた腕時計を見ると午後5時を示していた。

カティもメイドの仕事があるのか部屋には居らず、1人ベットの天幕を見上ると、両目から両耳にかけて濡れているの感じた。

何の夢を見ていたのかまったく覚えていないが、どうやら悲しい夢を見ていたらしい。

部屋で1人だからか、空の茜色がとても綺麗だったからか、それとも風邪を引いて弱っているからか、どうにも思考がネガティブになっていた。

「あら？ 起きてらしたのですか？」

「ん？ うん、つい今しがたね」

「あ……どうされたのです？」

何かの荷物を抱えながら部屋に入室してきたカティが、私が起きている事に気がつく、荷物を置いて駆け寄ってきた。

私の目が紅く目の端には涙を流した跡でもあったのだろう、気遣わしげな顔を向け尋ねてきた。

「ん、んゝ覚えては居ないけど悲しい夢を見たみたいでね……」

「そう……ですか……」

「我ながら女々しいなと思わないでもないんだけどね……」

「いえ……それ程1人の人を慕う事が出来るというのは素晴らしい事だと思います」

カティは私が言った言葉を噛み締めるように目を瞑り、胸に手を

やってゆつくりと言葉を発していた。

恐らく私は弱っているのだろう、少しだけ、少しだけカティに今抱えている悩みを打ち明けたと思った。

「生きている間ずっとなのか……それとも時間と共に薄れていくのかは分からない、でも今はその人を愛している。しかし同時に、恐らく帰れないだろうというのも頭で理解している。だから私は……気力をなくして朽ち果てるか、必死に生きていくしかない。生きていく為には、マレーナ王妃やティーナやカティの助けがなければ生きていけない」

「いえ……私は……」

カティが何か口ごもっていたが、恐らく謙遜しようとしているのだろう。

「いや、カティが居てくれて助かってるよ。じゃなければここまで落ち着けることは出来なかったと思う。マレーナ王妃やティーナにしてもそう……生きようと思うのなら皆の助けが必要で、助けを請う方法も、恩に報いる方法も、結婚という方法しかないんだ。……私は……どうしたらいいのだろう？ 私……皆に対して誠実に向き合えているのだろうか？」

私は以前『後見人』という立場じゃダメなのか聞いた事がある。結果として、否定の言葉と共に告げられた理由は納得できるものだった。

瓦解寸前の王国にカリスマを持った者が現れ、誰にも属さず存在すれば派閥が生まれてしまう。

即ち『顕現者派』と『王族派』だ。

当人同士にそのような確執は無かったとしても、周りがその様に動いてしまうだろうという事だ。

だからこそ結婚という方法しかなかった。

「それに……今では自分の気持ちがよく分からなくなってしまった。出会いの最初に結婚の話が出たからか……以来ティーナの事を意識するようになってしまったんだ。確かに優子を愛している。……しかし同時に『私を支えてくれる人』なんて考えると……ティーナをととても大切に思うようになってしまった。最近では支えてあげたいとも思うようになってね……私は本当に誰かを愛しているのだろうか？」

カティはこんな事を聞かされても困ってしまうだろう、現にどう返答したらいいものかと悩んでいる。

「……わかるかったね、こんな話をして。誰かに聞いて欲しくなってるね、話せただけでも少し落ち着けたよ」

「いえ……ケイスケ様、私はこう思うのです。ずっと1人の人を慕い続けるというのも素敵な事だと思います。でも……生きるというのは決して1人では出来ません。ですから……支えて下さる方をお慕いするのは自然な事だと思うのです。ましてや、お慕いする方どころか知り合いの方とすら逢えぬとなれば……」

カティの話も分かる。

しかしそれは『愛する』という事ではなく『依存する』という事ではないのだろうかと考えてしまう。

唐突に訪れた悲劇に堪えられぬからと、身近に居る異性に縋っているだけではないのかと。

「私は小さい頃に父を亡くしました。……母は父を慕い続け、私を育ててくれたのですが、ある日心労で倒れてしまいました。……その時の母に対し、父方の祖母が問い掛けた言葉を私は今でも覚えて

いるのです。『父を想い続けるのも良いが、父の本当の願いはなんだろうね？ 貴女が苦しめば父も悲しむ』という言葉です。ですから……逢えぬのであれば、お互いの幸せを願うというのが『向き合う事』じゃないかと……って、すみません……何言ってるんでしょうね私？ どう説明したらいいか……」

カティは一体どんな道を歩んできたのか、凡そ15歳の感性ではない気がする。

少し自分が恥ずかしくなった。逢えないというのを何処かで否定しているのだろう、先ずそれを受け入れよう。

私は本来取るべき姿勢と言うのを思い出した。自分の不義さに嫌悪感を抱くより、優子の幸せを願うべきだった。即ち『自分の事は忘れろ』と、元の世界では私が失踪している事になっているのだろう。

まさか別の自分が生活しているなんてことは無いと思う。

どちらにしても関与出来ないのだから、優子の幸せを願い、これから目標を探していこう。

そしてゆっくりと自分の気持ちにも整理をつけよう。

「いや……なんとなく分かったよ……ありがとう」

カティはワタワタと恐縮しながらも、少し落ち着けた私を見て安心したようだった。

「お休みの所失礼致しますぞ、顕現者殿。その後お体の具合は如何ですか？」

夕食にはまだ早い時間、空は茜色から夜へと変わる頃、部屋にエルンスト将軍が訪れた。

本日私が体調を崩してしまった為に、急遽指揮を取ったのでその報告という事だった。

「今日は急な話ですみません、エルンスト將軍。おかげさまですっかりだるさは消えましたよ」

「それはなによりですな。戦後処理も終わっておりますし、軍団の再編も7軍団の編成に、私はやる事が無くて暇を持て余しておったので、丁度よい肩慣らしで御座いましたよ」

「そう言っていただけと気が休まります」

雑談を交わしたあの夜以降、エルンスト將軍に対して最初に抱いた『紳士』という印象は若干変わり、『気さくなおじさん』という印象を持つに至ると、エルンスト將軍の言葉遣いも主従の関係を保ちながらも気安さを表していた。

「顕現者殿が行なっていた試験農場とやらですが、万事滞りなく作業は終了いたしましたぞ」

倉庫は木材の枠組みが届き、正面の壁の代わりの木枠や窓枠として設置し、木炭や鶏糞もそれぞれ指示通り撒いたとの事だった。

「失礼致します、圭介様。お体の具合はいかがですか？」

エルンスト將軍と2、3言葉を交わすと、今度はマレーナが顔を出してきた。

病気になって千客万来というのが少し嬉しかった。

「ようやく体もすっきりしてきましたよ、マレーナ王妃」

「まあ、それは喜ばしい事ですわ。それで、お休みの所申し訳ないのですが、人員を募集していた件で一部雇い入れました」

話を聞くと、農業を生業としていたが自分の畑は基本的に痩せており、休耕地を作る余裕が無かった為に牛の糞を集めておいて、種撒き前に糞を混ぜるという事をしていたが、去年病気で牛が死んでしまい、今年の収穫は絶望的だと考えていたという、そんな農家の家族が1組申し出てきたらしい。

それと雑務での募集にも2組決まったそうで、こちらは2組とも父親を失っており、働きの不足という部分で農家として立ち行かなくなったらしく、私の様々な実験運用の雑務を行う者が、共に若年である16歳と15歳の長男という事だが、仕事的には問題ないのでそのまま雇用したとの事だった。

この3組以外にも募集はあったようだが、言い渡された条件が変更不可能である事を知ると、それならば今まで通り村で援助し、村としても立ち行かなくなった場合再び雇用申請を試みる、という話で落ち着いたらしい。

しかし、この3組に付いては、近隣住民の全てが援助する余裕を持ってない地域だった為、即座に決定したという事だ。

「炭焼の技術を持つ者に付いては、炭焼を生業とする者が遠方であるため、結果の報告と当人の到着が遅れております」

「分かりました。……そう……ですね。まず、試験農場を管理する家族は、試験農場の所にある家に住んでもらいましょう。それで奥さんは紙の開発を行なう場所に通ってもらいます。それで紙の開発を行なう場所ですが……鍋や釜戸、作業台や休憩所、あと日当たりのいいちょっとした庭等がある場所がいいですね……適当な場所がなければ王城の一部を改装してそれに当ててください。それで他2組の家族が住む場所ですが……」

「ああ、顕現者殿。その紙の開発と住む場所なら私の別宅をお使いください。別段使っておらぬゆえ、売り払って兵士達の防具にでもしようと思っただけですよ」

エルンスト將軍からの援助の申し出を感謝と共に受け入れ、他2組の住居と紙開発所の目処はたった。

「エルンスト將軍。別に見返りという訳ではありませんが、秘密裏に新組織を立ち上げて欲しいのです」

「新組織……ですと？」

コレはマレーナにも伝えていなかった事なので、今度は何事を始めるのだと、2人共少し腰を浮かしていた。

「はい、マレーナ王妃の意向もありますし、私自身も、魔族に備えるのであれば無駄な戦争は避けるべきと考えてます。しかし何の対処もしなければ、必ず相手から仕掛けてくると思います」

「そうでしょうか……」

「そこで対抗策を講じて欲しいのですが……私は営業マン……この世界で言うところの商人でした。ですから私はこう例えて考えたのです。王国は私達が経営する店で、皇国は売り上げを競っている他の店、国に暮らす人々はお客さんという具合です。そう考えると何が一番望ましいか？ それは、お客さんを他の店から離れさせ、自分の所のお客さんにしてしまうのです」

ライバル店に流れている客を、自分の店に鞍替えさせる。

そうすれば自然とライバル店は衰退していく、そこでライバル店を吸収すれば一気に企業規模は上がる。

ライバル店を潰すという選択肢もあるだろうが、同業種の仕事に慣れている人材というものを失ってしまう。

ならば完全に潰してしまうより、吸収合併した方がすぐに次のステップへと進める。

コレを現在の状況に当てはめると、国を支える臣民達が見切

りをつけ王国へと流れ込んでくれば、生産力を含む国力の低下へとつながり、皇国が抱える軍事力そのものが維持できなくなってしまう。

その間は、双方共に出来る限り血を流すことなく牽制をし続け、国力の低下と共に起きるであろう『不信感の蔓延』を利用して、兵士からも離脱者を出せば王国の兵士が増える事になる。

よしんばその者が母国に剣を向けたくないと言っても一向に構いはず、その際は普通に一般人として国内のあらゆる物資の増産に寄与してもらえばいいだけの話だ。

そこまで今後の構想を説明すると、二人ともポカンと口を開けていた。

王族や貴族、それに伴う騎士道に似た思想が前面に出ているこの世界では、こういう姑息な手を考える者が少なかったのかもしれない。

「なんともはや……悪巧み此処に極まれり……といった感じですか……しかし、そう簡単にいきますかな？」

「そう……ですわね……」

2人の呆れ果てた様子を気にすることなく、そもそもの発端である『新組織』の説明を開始した。

「それでエルンスト將軍には、王立遊撃軍から悪巧みが得意そうな者100名集め、戦略戦術研究させた上で30名程に絞ってください。それと同じように、目端の利く者100名を集め、諜報活動の研究をさせて40名程度に絞ってください。それが出来たら、名称は任せますので戦略研究の組織と諜報活動の組織を作って、戦略研究の組織を上位として、その下部組織に諜報活動の組織と軍組織である王立遊撃軍を組み込み、エルンスト將軍はそれらの組織を纏めた機関の長に就いてください」

私は、情報を収集する者、それを処理する者、そして処理し決定された行動を実行する者を確立させようと考えた。

正直なところ軍組織には介入したくなかった。

ただの営業マンでしかない私には『他人に殺し合いを指示する』という事に嫌悪感を抱いていたし、正常で居られないと思ったからだ。しかしこのまま正面決戦による戦いを繰り返していたのでは、全ての苦労が水泡に帰してしまう。

『戦争とは一外交手段である』『戦争は金が掛かる』という二つの言葉を何かで見たことがあった。

『戦争の軍需による好景気』という言葉も見たことがあったので、戦争によって経済が疲弊するとは言い切れないだろうが、しかしそれは一時的だろうし、勝っていればだと思う。
稼いだそばから浪費されたのでは、再建の目処もなにもあったものじゃない。

だからこそ、無駄がなく犠牲を出さない為の組織が必要で、その為に軍組織に介入せざるを得なかった。

テレビや漫画からの知識を流用し、営業の仕事に置き換えて類推してみただけの事。

自分の考えに絶対の自信があるわけじゃない、しかし正面決戦を繰り返すよりはマシだというのは断言できる。

「話は分かりましたが……具体的にどのようなのです？ 漠然としか見えてこないのですが」

何を学び、相談し考えればいいのか、拙いながらも説明をした。戦略とは、最大目標迄の道を示すという事。

その戦略を効率よく達成する為に行使されるのが戦術で、それら全ての判断材料になるのが情報であり、それらを収拾したり、こちらの目的に沿うように情報の流布するのが諜報だという事。

私自身も伝聞で知っている程度の方法なので、提案という形で意見

を出す事を説明した。

また諜報活動は軍事面だけではなく、他国の産業割合や市井の人たちの生活状況、どんな物が潤沢にあり、どんな物が不足しているのか、それらの情報も収集する事で、出来上がった紙やアルコールの販売先、不足している食料品等の購入先の選定などにも役立てようと考えた。

「そういう事ですので、ほぼ手探り状態ですがなんとかお願いします」

エルンスト將軍にその事を告げ、その後にマレーナから明日の段取りの説明を受けた後でようやく体を休める事が出来た。

明日はいよいよ婚約披露会、婚約後に何が変わり何が変わらないのか、後戻りの出来ない所まで来たのだと改めて噛み締めながら目を閉じた。

第12話…婚約披露宴

起床してから1刻、凡そ午前10時にヘレナ教の司祭から祝福を受ける事で式典は開始された。

ローゼンバーグ皇国を興したコンラッドに組したヘレナ教だったが、一部の者が『戦争を起すのは教義に反する』として新たにヘレナ教を創設したそうだ。

ヘレナ教の司祭に祝福を受け、婚約が正式なものになったところで城のベランダにティーナと2人で並び立ち、マレーナの演説のもと詰掛けた観衆に手を振った。

自分の母校の朝の集会の数倍、見当も付かないが万人単位の人間に見守られていた。

「現実感がまったく無いよティーナ」

「そう？ 時機に慣れるわよ」

手を振り、顔を前に向けながらティーナに愚痴をこぼしたが、ティーナはそんなもの何処吹く風と清しい顔を保っていた。

この世界に来てから20日、特に堅苦しい行事などはなく、日頃の生活においても可能な限り気楽な対応をとお願ひしていたが、恐縮され仰々しい挨拶をされる事は多々あった。

ある程度は致し方ないと判断し、自分の部下だと思っておこうと割り切っていたが、流石にこういった式典となると華々しさ、格式の高さは別格で『ここは貴族の住む場所で、自分のいる場所は王に連なる者の居る場所なのだ』と、現実感の無さと場違い感でフワフワした感覚を覚えていた。

臣民に向け婚約の宣言が終了すると時刻は正午近くになり、貴族階級による立食パーティーが開催された。

得意先は整備工場に建設会社、接待の会食となれば飲み屋で客がチ

ークダンスを踊っているのを眺める事が多く、本社の集まりでも『もと取ってやる』とばかりに食べ物をかき集めて席で食べまくるという、ビュッフェという洒落たものじゃなく、バイキング食べ放題といった様相のものしか経験した事がない。

凡そ貴族とは正反対のパーティーの経験しかなく、食べたくても席はなく皿を持って人も人が来る。

無難な挨拶を交わし婚約に対しての祝辞を贈られ、昼食を食べる暇も無く次から次へと人が訪れた。

来る人皆がやたら豪華で誰が誰やらわからなかったが、辛うじて覚えていたのはその内の数名だった。

王国には王都以外に都市が3つある。

王都の南、モルダウとの国境付近の西境川、その少し北に位置する漁港都市カーティス。

王都の北西に位置する漁港都市、カティの故郷でもあるブラント。そして王都の西、王都とローゼンバーグ国境との大凡中間地点を流れる縦草川のすぐ傍にある商業都市シュトライトだ。

都市を代理統治する者には侯爵号が贈られるが、それぞれの第一印象は都市の立地条件を反映しているようだった。

「お初にお目に掛かります、王太子殿下。私はシュトライトの代理統治を任されているハインツ・フォン・シュトライトで御座います。以後お見知り置きを」

「よく来て下さいました、田中圭介です」

見た目の年齢は40歳後半、金髪青眼で髪をオールバックにし、これぞ貴族だといわんばかりの威圧感があった。

騎士と言われても軍師と言われても違和感がなさそうで、何処と無く冷徹な印象も受けた。

地方貴族の3名の侯爵の中で、一番ローゼンバーグに近いためか所謂鷹派の中核をなす人物らしい。

反対に鳩派の中核になっているのが、ローゼンバークから一番遠いカーティスを代理統治するエミール・フォン・カーティス。

見た目の年齢は80とも90とも取れる年配の人物で、白い髪も髭もストリートでやたら長く、RPGなら伝説の剣でも授けてくれそうだなというのが第一印象だった。

王都に最も近い北西のブランドを治めるゲルハルト・フォン・ブランドは特に目立った印象も無く、周りが欧米人の如く体が大きい事の対比で、一般的東洋人でも背の低い部類に入りそうな身長の高さが特徴になっていた。

雑談でも鷹派や鳩派に属する者達のように自己主張をする事も無く、王家の意向に従いますよという意味を強調していた。

「御婚約おめでとう御座います、王太子殿下、王女殿下」

「有難う御座います、ベッケンハウアー將軍」

「めでたき日を迎えられた事を臣下一同お祝い申し上げます、王太子殿下、王女殿下」

「ありがとうクラウス」

続いて挨拶に訪れたのは、第一王国軍軍団長ヘンゼル・フォン・ベッケンハウアー侯爵と近衛騎士団長のクラウス・フォン・ブランド侯爵だった。

長髪長身、金髪青眼で引き締まった体つきをしている近衛騎士団長のクラウスは、ティーナとは旧知の仲らしく、言葉を交わす程度の関係は持てているらしかった。

ベッケンハウアー將軍は軍人らしく、貴族と言うよりも蛮族という言葉が適していなくも無い、かなりの巨体にスキンヘッドという、夜道では絶対に会いたくない人物だった。

しかしその精悍な顔つきもあって、戦場に立てば頼もしさを感じるだろうというのも、また別の一面の印象だった。

この5名はそれぞれの分野の束ね役でもある為、今後の活動でなに

かと接点を持つ事になるだろうと、ティーナより事前に教わっていたのも覚える事が出来た要因かもしれない。

もう1人、中央貴族に執政官長を勤める侯爵がいるらしいが、本日は病氣療養中という事で欠席していた。

「お初にお目にかかります、顕現者殿……いや王子殿下とお呼びするべきでしょうか。私はモルダウ国弁務官、グレオス・フォルテウスで御座います」

そして、浮き足立っていた披露宴で異彩を放っていたのがエルフ族であるフォルテウスだった。

金とも銀ともとれない淡い金色の長い髪に、モデル体型と言って良いスタイルで、第一印象が理知的な優しい女教師だったが、どうやら男性らしかった。

聞けば、戦場に現れた顕現者がハルトヴィック王家を継ぐという情勢に際し、友好的な関係の継続と更に関係を深めるべく本国より派遣されたらしい。

国家再建に関して一案あった私は、後日話をする約束を取り付けると、再び貴族達との挨拶へと向かった。

「……………」

気がつけば自分の部屋のベットの上で目が覚めた。

酔って寝てしまったのだという想像は付いたが、隣でティーナが寝ている理由が分からなかった。

「……………おはようティーナ……………」

「……………おはよう……………」

記憶を手繰り寄せる間もなくティーナが目を覚ました為、気まず

いながらも朝の挨拶を交わした。

照れている様な、怒って睨み付ける様な、なんとも判断しにくい表情でこちらを見たかと思うと、すぐさま顔を背けてしまった。

そこへ体調を心配して顔を出してくれたマレーナとエルンスト將軍によって、昨夜の一部始終を説明された。

曰く、貴族達と挨拶を交わしていたがフラフラし始めたので席へ付いた。

その際足取りが少し危うげだったので、ティーナが手を握り席まで誘導したが、席へ付くなりティーナの肩にもたれ掛かって寝てしまったらしい。

エルンスト將軍も挨拶の順番待ちをしていたが、ようやく挨拶に向かってみると寝ている私と紅くなって困っているティーナを発見し『祝いの酒で酔われたらしいのでお休み頂こう』と会場に向け提案し運び出されたらしい。

その際、ティーナと握っていた手を解かれるのを嫌ったらしく、ティーナ共々寝室へと向かった。

ティーナが疲れてベットに腰を下ろしたのか、私が引っ張ったのかは定かじゃないが、腰を下ろしたティーナの膝に頭を乗せ、腰に手を回して膝枕で寝始めたらしい。

披露宴が終了して顔をだしたマレーナが、膝枕をしている私とティーナを見るや、喜色満面に『どうやって攻略したのだ』等と囁し立てたが、寝てたはずの私が『ティーナの容姿と性格なら努力しなくても男はイチコロだ』とマレーナに向かって力説したらしい。

その後再び眠り始め、無理やり引き剥がすというの中々出来ずに困っていると、ティーナが諦めたように『一緒に寝るからいい』と進言してくれたらしい。

「酒に飲まれてしまい無礼な行いをした事を平にご容赦下さい」

話を聞き終えた私は即座に土下座の姿勢を取ると、謝罪の言葉と

共に頭を垂れた。

「……まあ、酔ってしまったんだもの仕方ないわね……許してあげる」

「わたくしは逆に貴重なものを見させて頂きましたわよ、ふふふ」
「お、お母様！」

ティーナが照れながらも謝罪を受け入れてくれたのに、マレーナが尚も囁し立てたので暫く收拾が付かなくなった。

暫くぶりに酒を飲んだ、空きっ腹で動き回りながら飲んだ、緊張が解れ出した等諸々の事情が絡まって酒で記憶を無くしてしまった。披露宴の初期に重要人物と会話できたのは不幸中の幸いと言えるだろう、エルフ族の弁務官フォルテウスと会話した後の記憶が薄っすらとしか残っていない。

兎も角も、風邪は治ったし二日酔いもしていない事を告げると、ようやく王子としての今後の説明に入った。

今までとの生活の違いとしては、極力ティーナと行動を共にする事と、各貴族とのお茶会の名を借りた話し合い等が予定として組み込まれる位らしい。

立ち位置が公のものとなった事と、国家再建事業の規模が大きくなって行く事を考えると、今後より一層関係部署と関係者が増えて来るだろうと考え、今日は全体的な計画の再確認と、要人の素行調査的な事を行なおうと考えた。

現状を整理する為に報告の纏めをお願いすると、朝食を食べ終わる頃に報告が届き、自分の部下が持ってきた報告だからという事で、エルンスト將軍の口から報告を受けた。

「まず、試験農場の件ですな……農場を監督する者とその指示に従い雑務をこなす者、それぞれの家族の転居は済んだようですな。畑には麦、豆類2種、ケール、カブルを植えたそうです」

ケールというのは食卓に並ぶ野菜の筆頭と言ってもよかった。

茹でたものをステーキなどの付け合せにしたりする野菜で、キャベツに似た野菜だった。

カブルというのは元は飼料用で、現在では食糧不足から食用に調理され始めている根野菜らしい。

「いずれも種まきの時期が遅かったことが心配だそうですが、種を撒いたのが2月7日なので今月終わり頃には、発芽するかどうかという最初の結果が出るという報告ですな」

種まきの報告に続いて馬糞が運び込まれた事も報告を受けたのだが、たった数日で必要量が集まってしまった。

よくよく考えなくても約2千名で構成される1軍団に200頭前後は確実に居るので、仮に5軍団で考えても千頭は居る計算になる。

千頭も居れば数日で必要量が集まるのは目に見えていたのだが、動物が1〜2頭いる一般的な農家の計算で考えていたので、まさか数日で集まるとは考えていなかった。

慌てて枯れ草と余っていればワラ等を入手し、すぐにでも馬糞に混ぜるよう手配した。

エルンスト將軍の報告に続き、ティーナ自身がマレーナに要請し持参して来た報告書を読み上げた。

「こっちの報告は試験農場以外のことについてね。まず城内の作業場は完成、ただ水を入れて紙を作る台と言うのが難しいらしくて、今も試験中ってことらしいわ。あとは・・・銅の管？ というのが出来上がったらしくて、設置場所が決まったら施設を作るってことみたいね」

施設完成の目処が立ち、人員の確保も出来たので、いよいよ原材

料の確保が必要になってきた。

王と傍の湖畔の森で材料になりそうな雑木の採取をしてもらおうと、エルンスト将軍にお願いした。

「取ってきた物は後で分別しましょう。勝手に群生しているのか希少なのか？ 紙の材料として以外に利用価値があるのか？ その辺りで分別すると良いでしょう。あとティーナ川に生えている草に付いては何か言っていなかったかい？」

「ああ、ごめんなさい違う紙に書いてあったわ」

報告によると、繁殖能力はかなり高いらしく、刈り取っても翌年にはワサワサ生えてくるらしい。

魚の住みかとしてわざと残す部分はあるがそれ以外を根から引き抜き、魚の追い込み漁をする際に根を残して全部刈り取っても、翌年には再び芽を出す上に地下茎を伸ばして違うところにも芽を出してくるらしい。

それ程の繁殖能力なので、魚が取れるのであれば下手に川に植えるとか余計な仕事が増えるだけだぞという現地の人間の進言もあったとの事。

王都の傍の湖にでも植えようと考えていたが、そこまで強い植物なら生態系を壊しかねないなと思ったので、植え付けは断念し、必要になった際は取りに行くと言う方針に固まった。

蒸留施設に付いては森の近くに小屋があった為そこを住居とし、その傍に炭焼の窯と蒸留施設を設置してくれと手配した。紙に付いては台が完成次第、アルコールに付いては施設完成後にワインで実験をし、炭焼用の木が搬入されてから本格的な試験開始という段取りになった。

第13話：王子の初仕事

朝起きて農場の様子を見に行こうと思ったのだが、早速公務の予定が組まれたらしく余り時間は作れないとの事だった。

一体何をさせる心算だと腰が引けたが、どうやら披露宴で挨拶できなかった人達の面会と、ちょっとした話し合いらしい、ただ人数が多いので午後は全てそれに費やされるかも知れないという事だった。

「挨拶は大事かも知れないけど、何も翌日に来なくても……」

「文句言わないの」

そんな風に進言してきたティーナだったが『出来るだけ一緒に』という指示の下、自分も国家再建事業に参加出来ると期待していたのに、出足から貴族との面談で潰されたと不満そうにしていた。

取れる時間が少なくなってしまった為、確認と指示だけはと早速農場に足を向けた。

「おお！ 王太子様！ このような場所に足をお運びになるとは！」

「あゝあはは、まあまあ、で？ どのような状況ですか？」

40歳前後の農夫にやたら恐縮され話が進みそうに無かったので言葉を遮り、進展状況を確認した。

「へえ、仰せの通り畑は種まきを終わらせましたです。それで51箇所にも区分けしてるもんで……なんの畑だか分かったので看板でも立てた方が良くないじゃないかって事で、看板だけ追加したんですあ」

確かに言うようにそれぞれ区分けした畑には、炭、鶏糞の分量と

植えてあるものの名前が書いてあった。

「あと馬の糞は枯れ草混ぜろって話でしたんで、兵士の方が集めてくださった草とワラを混ぜたところですよ」

堆肥置き場に行ってみるとそれらしくなっていた。

ティーナはその臭いがたまらないらしく、悔しそうにしながらもなにやら『こんなはずでは』と遠くでブツブツ呟いていた。

親戚の農家で眼にしていた堆肥置き場は牛小屋の隣にあり、雨が掛からず風通しが良い場所だった。

時折堆肥から湯気が出ているのも見たことがあるので、結構な発酵熱が出ているんだと思う。

農具のフォークで軽トラに積んでいる様子も見ることがあるが、堆肥の状態というのは泥団子を作った時の土程度の水分量だったような記憶がある。

今後このまま放置すると湯気が出るはずで、湯気が出る程暖かくなる事が大事だという事と、全てが躊躇半端な知識である為、現在は一箇所に纏まっている堆肥を左右2箇所に分け、それぞれの水分量や、湯気が出始めてから3〜5日後にかき混ぜる等、分けた二つの堆肥の堆肥化の作業を若干変え、どういう方法が最適か探りながら作業してくれと伝えた。

「分ける話は最初に言って置けば良かったんだけどね、その時は思いつかなくて……申し訳ない……重労働だけど大事な事だからよろしく頼みます」

「いえいえいえ！ お顔をお上げ下さい王太子様！ この条件が厳しかったんで、ウチのもんにも言つといたんですが、来て見たら『パンだけは食べれる』だったのが『食べもんは腹いっぱい食える』に変わってたんでウチのものと喜んでしまったんですわ。だけん喜んでやらさしてもらいますよ、わははは」

「そう言っ頂けるとありがたい」

農夫への指示を終えてから『そういえば記録も必要だな』と思い立ったのだが、その農夫は申し訳なさそうに字が書けない事を告げてきたので、雑務の者に毎日報告に來させて欲しいと指示を出しておいた。

続いて城内にある製紙研究室を訪れると、思いもかけず子供の世話をしているカティに出くわした。

「どうしたのカティ？ こっちもカティの担当だったの？」

「あ！ ケイスケ様！ えっと、担当という訳ではなかったんです
が……この方達の転居のお手伝いをしてから、何かと訪れることが
多かったもので……」

転居以降入用の物を手配したり作業場への案内等をしていたので、
そのままなし崩し的に世話をしていたらしい。

そうして付き合いを重ねた為か、そもそものカティの性格故か、母
親について来た子供達にやたらと懐かれていた。

その姿を見ながら先程の字の書けない農夫の事を思い出し、学校と
いうか寺子屋的なものの先駆けとして、この子等に最低限の事を教
えてみるのも良いかもしれないと、再建案の構想の一つとして今後
の課題の欄に書き加えておいた。

「それで、作業は進んでるのかな？」

昨日のうちにある程度木々が運び込まれており、奥を見ればそこ
かしこに木の枝等が山積みになっていた。

「はい、材料は昨日運び込まれたのですが、ごちゃ混ぜになってい
たので分別しておりました。窓際から紙以外に用途が無くて、そこ

かしこに生えている物、その隣の台が用途は無く生えている数が少ない物、その隣が用途があり生えている数が多い物、その隣が生えている数が少ない物です。それぞれの用途は分別した場所に書いておきました」

カティの言う様に、台の上には分別され小分けされた枝が積まれており、現在分別されている物でも15種類程度存在していた。

「あと、分別中に毒のある枝があったみたいで……子供達が触らないように上の棚に上げてあります」

成る程みれば天井近くの棚にも枝が積まれていた。

まだ分別していない枝の中にその枝が混じっているかも知れないので、子供達がそこに近づかない様にカティが子供達の面倒を買って出たという事だった。

その後試作を繰り返しているという台に向かうと、台は問題なく出来上がっていきそうだった。

眺めていると奥の方でガサゴソしていた職人らしき男性が近寄ってきて現状の説明を始めた。

「御覧の様に台と枠は出来上がったんですが、枠の底の網が中々上手く行きませんで……」

水と繊維を入れる水槽はしっかりと組み上がり、水をすくい上げ繊維を濾し取る木枠も出来上がっていた。

ただ、繊維を濾し取る際に余分な水を排除する底板の部分が中々上手く行かないという事だった。

現在は、細い木の棒を並べて麻紐で編み込みそれを貼り付けてある。ただし、両端のみで編み込むと水の重さで木の棒が折れてしまい、編みこむ箇所を増やすと麻紐のせいで隙間が開きすぎるという事だ

った。

その対応策として両端以外の編み込み箇所は1つ飛ばしで編み込んであった。

「今ん所糸くずを水に入れて濾してみたんですが、濾すのは出来るようになって、それをどうやって底板から剥がすかったのがわからんのですよ」

木枠を水に沈め水をすくい上げジャバジャバやると、その内底板に糸くず製の膜が出来上がっていた。

しかし底板が接着してあるため、指などで剥がさないといけないが、すぐに破れてしまう為不可能と言ってよかった。

目を瞑り薄れた記憶を辿ると、体験学習のあの器具の底板はワンタツチで取り外していた気がする。

どういう構造だったかさっぱり覚えていないので、暫く悩んだ後思いついた構想を提案してみた。

「底板を取り付けるんじゃないくて、木枠の幅より長くして巻き込んでから抑えたらどうだろう？」

現在スノコ状になった底板はしっかりと枠に組まれていた。

そこで、スノコを木枠の幅より長めに作りその両端を木材にし、スノコの上に木枠を置き、余った両端を外側から木枠の内側に折り込む様にして取り付け、外れないように枠に溝をつけそこに上から木材等で押さえてはどうかと説明した。

今ある木枠を手にも、身振り手振りで説明するとやってみる価値はありそうだと、早速作業を開始していた。

作業台の事が一段落し、改めて今後の指示はどうしたものかと思っただが、自分の周りには見知った人達の方がやり易いなと思い、カティを製紙研究室担当になってもらおうと考えた。

あとでマレーナに頼まなくては。

「とりあえずカティ、今日はここにつきっきりになってくれ。作業内容は今から教えるから」

「か、かしこまりました。」

最初に煮るか蒸すかして皮を剥ぐ事、その後川などの水にさらして色の付いた外皮を剥がして内皮だけにする事。

木槌等で内皮を叩き、繊維を細かくした後灰を入れた鍋で煮込み、その後また川の水にさらす。

どの作業をどの位すれば良いかというのは分からないので、基本的には念入りに行なって欲しい事を伝えた。

「ふう……かなり駆け足で見て回ったんでまだまだ見たり無いね」

「そうね……でも私はなんとなくだけどケイスケのやってる事が見えて来たからよかったわ」

製紙研究室を後にし、執務室に向かいカティの件と縦草川の水草の件をマレーナに手配した後ようやく部屋に戻ってきた。

「それにしてもケイスケから知識を得た事で、今まで見てた物が違って見えるわね……」

「ははは……確かにそうかも知れないね」

あくまでも元の世界の事だからと前置きは付け加えているが、今では地球の成り立ちから生物の発生、生物の多様化と食物連鎖、全ての物は元素と呼ばれる粒で成り立っており、その粒が規則的に集まり形を変えたりして物や生き物を作っている事等を話してある。特に食物連鎖に付いてはこの世界の事を例に取りながら、植物が作った栄養を草を食べる動物が食べ、草を食べる動物が作った栄養を

肉食獣が食べて栄養にする。

動物が余分な物として排泄した物が糞で、それを土の中の小さな生き物が食べて糞に変える事で、今度はその糞を植物が栄養にする。そんな食物連鎖の循環の話等をして来た為、ティーナには今まわってきた作業場の風景というものが、この世界の人達とは少し違ったものとして映った様だった。

そんな感慨に耽りながら先程得た毒をもつ植物や、思い立った学校に関する構想をノートに纏めた。

その際、試験農場の記録の件を思い出し、多少紙を勿体無く思ったが過去を遡った分の記録と今後の日記をつけ始めようと考えた。

「会合って今日だけじゃないんだよね？」

「そうね……今日は昨夜挨拶出来なかった人が訪れるだけだから、そもそも地方貴族なんかで披露宴に出席出来なかった人達とか、一度挨拶を済ませて、会合を持ちたい人なんかが続々と訪れると思うわよ」

「……………」

元営業マンなので話し合いの席を嫌うという事はないが、営業と違い相手は終始笑顔で応対する。

しかし腹の中じゃ色々違う考えを持ってるわけで、その辺りが少しやり難いと感じていた。

時間が無いからと急かされるように昼食を食べ終えると、早速挨拶に訪れる者が現れ、自分の力を自慢したり、自分の趣味を披露したり、終始私に対するゴマすりに走る者や、挨拶もそこそこに意見申し立てをしてくる者等、営業、接待、討論と一貫性のない面会でほとほと疲れ果てた。

コレが暫くの間続くと思うと気がめいってしまう。

それに人数もかなりの数になるだろう事を考えると『履歴書』でも作ろうか等と、自分の息子の自慢話を始めた貴族を眺めながら考え

て
いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4171f/>

営業マンの異世界王様日記

2010年10月10日11時33分発行